月ノ鬼跡

夢希　悪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月ノ鬼跡

【Ｎコード】
Ｎ２６１０Ｋ

【作者名】
夢希　悪

【あらすじ】
人の心には、もとより鬼が住んでいる。鬼は人の憎しみを喰らいつき、悲しみの中で育ち、それが大きくなると人を殺す『鬼憑き』へと化す。『鬼憑き』は人を殺し『鬼神』はその鬼憑きを殺戮するためだけに生きる

プロローグ

「ねえ、何で君はそんなにも他人に無関心なの？」

――それは、自分には関係ない人だからだよ

「ねえ、何で君はそんなにもつまらなそうなの？」

――だって実際につまらないんだもん

「ねえ、何で君はそんなにも笑っているの？」

――これは僕の癖だよ。仕方ないのさ

「ねえ、何で君はこんなことをしているの？」

――それが僕の存在理由、僕がここにあるための掟だからだよ

「ねえ、何で君はそんなにも悲しそうなの？」

――悲しそうに見えるのかな？自分ではわかんないけど

「ねえ、何で君はこんなところにいるの？」

――何でって、君を迎えに来たんだよ

「ねえ、僕の名前は何ていうの？」

――そうだなぁ…ツクヨミはどうかな？『月の神』の名前だ

「ツクヨミ…変な名前。でも気に入ったよ、『月の神』が。
…じゃあ、君の名前は何？」

――僕の名前？僕の名前は――――……

第一話

月が綺麗な夜…丁度良いぐらいに欠けた三日月が辺りを明るくしようと輝く。
肌寒い夜に冷たい風が肌へと絡みつく。しかしその寒さをものともせず、二人の人物が道を行く。
一人は肩までストレートに伸びている髪は白く、長袖の黒のジャケットを着ていた。
そのチャックの隙間から覗かせる紅の色に黒の水玉模様が散らばっている服は派手なような地味なような、そんな矛盾を思わせる。
下にはデニムのショートパンツを穿き、左右とも模様と色の違うルーズソックスを履いていた。
一見、女の子と見間違えそうなその綺麗な顔立ちは、幼さを残していた。
身長は百五十センチぐらいだろうか、蒼い瞳で前を見据える。
その少年の隣には背が高い男がいた。
男は百九十センチもあろう身長で辺りを見渡した。
肌は黒く、がっちりとした体型の男は鋭い目つきがその身体に合っていて、何処にでもいそうだが何処にもいなさそうな男だった。
黒い髪はオールバックで後ろでまとめてあった。

「リクがターゲットと接触したようだ」
「…そう」

男がそう言うと、興味のないように呟いて空を見上げた。

「どうする、ツクヨミ？」
「…リクなら大丈夫じゃないか？」

ツクヨミと呼ばれた少年は短くため息をつく。
男はその様子を見て苦笑した。

「じゃあ、行くか」
「そうなるのか…。場所は何処？」
「多分、斜め二十三度の一キロ先」
「…行くか、フォル」

フォルと呼ばれた男とツクヨミは闇に一体化し、消えて見えなくなった。

長い金髪をツインテールでまとめ、淡い黄色と白のロングパーカーに茶色のスカートの少女。
身長は百六十ぐらいだろうか、年齢はおよそ十七歳ぐらいだった。
手には日本刀を握っていて、大きい瞳は真剣な眼差しを目の前にいる『ソレ』へと向けられている。
刀の鞘は抜かれ、その鋭い刃は月に照らされ輝いた。
少女は誰に向けても言ってないように…まるで自分に言い聞かせるように言った。

「『鬼憑き』になった者はたとえ人畜有害なヤツだろうと人畜無害なヤツだろうと――」

少女は一瞬で間合いへと踏み込み、刀を振り上げる。

ソレは一瞬遅れて刀へ反応する。
しかし、少女の方が圧倒的に早く、そして圧倒的な力の差があった。

「――――殺すッ！！！」

振り上げた刀を、重力と共に自分の力を乗せて強く振り下ろした。
ソレはその攻撃を避ける事も反撃しかえす余裕もなく、真っ二つに裂けた。
普通の人とはかけ離れた、緑色の血飛沫（ちしぶき）があがる。

「それが私たち『鬼神』の存在理由だ。冥途の土産に持って行け」

真っ二つに裂けたソレは地面に倒れ、さっきの奇妙な気配を消しただの屍と化す。
少女は、短くため息を吐き、刀からソレの血をふき取ると鞘へと納めた。
と、それと同時に闇から影が現れた。
白い髪の少年と黒い髪をした男…ツクヨミとフォルだった。

「あちゃー…もう終わってた？」

フォルの問いは呆気なく返された。

「フォルにとっては遺憾千万（いかんせんばん）ね」
「あー…イカ…？？ま、いいや。折角、心配してきてやったのによー…」

子供が親の知らなかった事を、自分の友達にでも自慢するような笑みを浮かべ、鞘に納まっている刀の先をフォルへと向ける。

「私みたいな秀才を心配するとは…心に隙があるんじゃないか？」
「あのなぁ…なんでこう、素直に言えないのかねぇ？？ツンデレ？まさかのそういう時期なのか、リク？」
「ツンデレとは失礼な事を言う！！私は立派な侍だッ」
「――――…ほう？…ツンデレ侍というのも萌える」

フォルのその台詞のせいで辺りが沈黙に包まれる。
ただでさえ静かな月夜に、冗談とも本気とも取れないフォルの言動はいつもどこかずれている。
その重い沈黙を破ったのはツクヨミだった。

「・・・変態」
「はん！ツキにも言われてやがんのー！」
「おまッ…！！リクのそう言うところがガキっぽいんだよぅ！！」
「五月蝿い、私は和顔愛語（わがんあいご）だッ！ガキじゃない」
「ちょッ！それ、反則だろ！」

リクと呼ばれた少女は今にも抜刀しそうな雰囲気を醸し出す。
そろそろ潮時と思ったのか、ツクヨミが間に入る。
リクは少し不満げに頬を膨らましたが、しぶしぶと刀を袋の中へとしまう。

「ま、時間なのはしゃーねーわ」
「時間があれば、その汚い面をもっと綺麗にできたのにな」
「何を言ってる！この顔こそが素晴らしいじゃないか…」
「…今度、鏡を買ってやるよ」

酷いッ、というとフォルは逃げるようにいち早く闇へと同化していった。

リクは思い切り舌打ちをするとツクヨミのほうへと向き直る。

「そういえば、ツキの仕事は終わったのか？」

「僕のほうはただの回収だ。リクのように『鬼憑き』相手ではないからな…」

「ふーん、そ。まあ、お疲れ様」

「・・・リクもな」

ツクヨミはただ淡々と事を告げた。

それには慣れているようで、リクも何の疑問も持たない。

しかし、傍から見れば異様な光景に見えるだろう。

長く大きな日本刀を持つ少女と、人間離れした異形な白髪をした表情になんの変化もない少年。

並んでいても、やはりリクの方が身長は高く、ツクヨミは十五歳ぐらいに見えた。それは顔に幼さを残しているからこそなのかも知れない。

「じゃあ、私たちも行くか。いずれエクソシストが駆けつけるだろう。後の処理は任せようぜ」

「そうだな」

そういうと存在そのものが目立つリクも闇に一体化し見えなくなった。見えなくなったのではない、実際にもうそこにはいないのかもしれない。

ツクヨミは最後にソレ――『鬼憑き』へと目を向けるといった。

「貴様の罪、しかと噛み締めるが良い」

そしてツクヨミもそこから消えていった。

第二話

「いやー、お疲れ様☆」

柔らかい笑みで三人を迎えたのは、眼鏡をかけた男の人だった。
ここは、ヨーロッパの奥深くにあるエファル街。
エファルには人が溢れており、名前通り街である。
発展都市でもあるが故に、人が集まり店が出て賑やかになっていったのである。
そのため、住む所も豪華な家々が沢山見られる。そこを『鬼神』の拠点とするのも限りなく都合の良い場所であった。
情報の伝達力や収集率、大きな建物を建ててもただの豪華で少し大きな家と見るか、集団で住んでいる集団住居と見るか、どちらかであろう。
その大きな建物が世を揺るがす『鬼憑き』を殺戮する『鬼神』の拠点地だとは誰も気付きやしないだろう。
そもそも、『鬼神』という集団はごく一般には知られていなく、『鬼憑き』という存在もほんの一握りの人が知っているだけだ。

「ただいまぁー…」
「はい、おかえりなさいリク」
「くーちゃん!!フォルのヤツがまた、変態な発言をだなぁ…ッ!!」
「はいはい。まあ、お風呂でも入ってきたらどうですか?」
男がそう言うと、リクは自分の臭いを嗅ぐと、顔をしかめて「後は任せた」と言ってそさくさと長い廊下へと歩いていった。

「ヴィクトリカ、報告・・・」
「あ、そうですね。では私の部屋へ」
「ああ」

ヴィクトリカと呼ばれた男は柔らかく微笑んで、歩き出した。それと同時にツクヨミもヴィクトリカに付いて行く。
ヴィクトリカは恐らくフォルよりも少し大きいぐらいだろうか、白の服をマントの様に着ている。髪は控えめな黒い髪で、髪をオールバックにしてツクヨミよりも短い長さで、眉目温厚（びもくおんこう）とはまさしくこの男から来たのではないか、というぐらいに優しい顔立ちだった。
しばらく長い廊下を歩くと周りとは少し雰囲気が違う扉の目の前へ来た。
その扉を開けると、一つの机とソファーがあった。ソファーは二つあり、座ると向かい合えるように置かれていた。
ヴィクトリカはそのソファーに座り、向かいにはツクヨミが座った。

「さて、例のモノはちゃんと回収してくれましたか？」
「・・・・・」

ツクヨミは何にもない空間へと手を伸ばす。突如、その空間から緋色に輝く宝石らしきものを取り出した。
それはとても綺麗で、見るもの全てを魅了するほどの美しさを持っていた。
ヴィクトリカはそれを受け取ると満足そうに机の上に置いた。

「さすが、ツクヨミだ。話が早い」
「・・・話ではなく、行動なのだが」

細かい事は気にしない、とヴィクトリカはソファーの横から茶色

い大きな封筒を取り出した。

「この『アロユール』を回収してくれなければ、自体はもっと悪化してましたよ」

「まあ、それが『鬼憑き』に影響を与えるからな」

「我らも、影響されてしまいますがね」

「元はおんなじ『鬼憑き』だ」

ツクヨミは自分の手のひらを眺め、呟くように言う。

その様子を眺め、ヴィクトリカはツクヨミにそのファイルを渡す。

「次の仕事です。今度は長期滞在になるでしょう」

ファイルを開き、中の紙へと目を滑らせる。

その用紙には、目的と場所、日時とメンバーなどが正確に書かれていた。

「グリニカ…。また随分と遠いんだな」

「まあ、そこら辺は大目に見てください」

グリニカは、エファルと遠くはなれたところにある街である。

エファルが発展都市というのならば、グリニカもそれと同等な発展都市である。

用紙のメンバーには、ツクヨミ意外にリクとフォルの名前も記されていた。

目的は『鬼神』としての『鬼憑き』の殺戮。そのために『鬼神』という組織は練成されているのだから。

「とりあえず、出発は来週です」

「??・・・随分と先だな」

『鬼神』という組織はエファルを中心として広がっている。
しかし、広がっているというのは、沢山のところに『鬼神』が存在しているわけでなく、エファルにしか『鬼神』という組織はないのだ。
つまり、エファルから他の地へと派遣してそこで課せられた使命を行うのだ。
他の地と、エファルでは基準が違ったり、言葉が違ったりとする場合が多い。
だが、ほとんどがただの『鬼憑き』の退治ならば、あまり話さなくてすむ。しかし、長期滞在するということは、文化の全く違うところで生活する事になる。
つまるところ、いろんなところに『鬼神』を配置させたいのだが、『鬼神』という存在も沢山いるわけではないのだ。

「しかし、大変なんですよ」
「向こうでは何があるのだ？」
「言語は一緒というところが一つの救いでしょう」
「？・・・順番が違うと思うが」
「実はですね…」

ヴィクトリカは、苦笑を浮かべてツクヨミの目を真っ直ぐと見る。
どうでもいいことに、ヴィクトリカは「ツクヨミって本当に女の子っぽい顔つきなのは何故？」という疑問が湧いて出てきたのだ。
ヴィクトリカの中では、その内容は既に他人事なのだから。

「向こうでは”学校”に通ってもらわなくてはならないのです」
「・・・・・・・・・は？」

第三話

意味が分からなかったわけではない。学校というものを知らないわけでもない。
ただ、ヴィクトリカが言う事を渋る、ということがなんだか嫌な予感がするのだ。
ツクヨミにとって学校というものは、ただの学び舎でしかなくくだらない集団が、くだらない事をただ教わる。それだけのもの。
『鬼神』にとって、『鬼憑き』を狩ることが全てなのだ。
社会というものも関係がないし、学び舎だって行ったことがないのだ。

「そう。つまり、その学校に行けるように取り合わせてるところなんだ」
「・・・はぁ」

長期になるしね、と言うと立ち上がり部屋の隅へと消えていった。
そこには小さなキッチンがあり、紅茶を入れる時は必ずそこに行くのだ。

「まあ、君はある程度の知識があるが、フォルはほら、見ての通りだろう」
「・・・」
「ま、そういうわけで一週間なんだよー。明日からフォルは勉強漬けだね♪」
「そういうことか」
「だから――…」

よっこらせ、という声と共にヴィクトリカが机の上に紅茶を二つ置いた。
風味からしてレモンティーだろう。紅茶の上にのっているレモンがある意味決め手だが。
目の前にある紅茶を、少し飲むとヴィクトリカは紅茶に映る自分の顔と見つめ合った。

「その一週間は、仕事はなしにしてあげるよ。最近、ずっと仕事だろう？」

ヴィクトリカの言う通り、最近のツクヨミ達は仕事で俗用多端（ぞくようたたん）だったのだ。
別に、ツクヨミにとってはどうでも良い事なのだろうが、相手の好意を無視するわけにはいかないかった。
そしてヴィクトリカは付け加えた。

「リクもね」

うまくやられたと思う。
ヴィクトリカは頭が良い。ツクヨミやリクも頭が良いが、ヴィクトリカは悪知恵がよく働くのだ。
ツクヨミは心の中で何回目かの言葉を吐いた。
ヴィクトリカの奴、上手くやったな…。
ヴィクトリカはツクヨミとリクに休息を与えた。それはとてもありがたいことだと思う。

しかし、相手はリクなのである。
暇ならば、と言って強引に市場に連れいて良かれ、着せ替え人形のように沢山の服を選び抜かれる。
普通の服が着たいのに。
ツクヨミが今来ている、ゴシック的な服もリクが決めて着させているのであった。
そして、昨日から一日が経った今日。
昨日の仕事は夜だった為、帰ったら直ぐに布団へと潜り込み眠りへと堕ちた。
そして朝、目が覚めると上にはリクが圧し掛かっていた。
ツクヨミはどちらかと言うと夜行性なので、朝は寝ているか、起きていてもボーっとしている。しかも、寝起きならば尚更である。
しかし、今朝の一件でパッチリと目が冴えてしまったのが運のつきであった。
ヴィクトリカにとってはただの子守の相手として、ツクヨミを選んだのだ。

「目が覚めちゃったのなら、ここに居てもつまんないでしょ？一緒に出かけよう！！」

半分、無理矢理連れて行かれたツクヨミは、そんな経由があって、このエファルの街へと来ていた。
隣には、当然のようにリクがいる。
服装は昨日と変わらず、ただ違うのはツクヨミのストレートの髪の毛が若干、撥ねている事だけであった。
ため息を吐き、明らかに不機嫌なツクヨミと、鼻歌まで歌って上機嫌なリク。
外見で見ても異様なのに、さらにそれぞれの態度の違いから、人々の視線を集めた。
それに、リクの背中には大きくて長い袋…日本刀が入っている袋

を背負っているのだから、尚更だ。
　しかし、さすが発展都市だろうか。異様とはいえ、なんでもありなのだろう。少しすると興味が失せたように、商品へと向き直る。

「さぁ、ツキ！！どの店から回る？」
「どの店にも寄らずにこのまま帰る、という選択肢はないのか？」
「ありませーん」

　ツクヨミの答えが分かっていたように即答して歩き出す。
　はぁ、と深くため息をつき、リクへと着いて行く。それはリクの子守がいなくなったら大変な事になると予想できるからだろう。

「さてさて…そこの店から行こうかなぁ…。やっぱり、ランジェリー？それともゴスロリ店？？あぁ…目の保養だわー！！」
「・・・」
「そう、まるで天国のよう！！四字熟語で表すなら歓天喜地(かんてんきち)よ！」
「それは、嬉しい様子であって、楽しいを表現しているわけではないぞ・・・」
「同じよ、お・な・じ！！はぁ…今からツキを色んな服で着飾れると思うと…ッ！！」
「僕は、男なので。そこらへんの店のスカートに目を向けないんでいただきたい・・・」

　その目は、近くにある服屋へと向けられていた。正確に言うと、洋服やに出されているスカートを眺めていた。
　リクの耳にはもう、ツクヨミの声や周りの騒音など一切聞こえておらず、ただ頭の中にはどうツクヨミを飾り付けるかということで埋まっていた。
　何度目かのため息と、何回目かの言葉を口から漏らした。

「！！？」
「・・・・・・・・・」

さっきまで、周りすら気にも留めなかったリクが、後ろに背負っている日本刀へと手を伸ばす。

「ツキ…」
「分かってる」

そもそも『鬼神』には休みがないことを忘れていた。
『鬼憑き』が現れれば、いくら休日と言えど仕事の始まりなのだ。
ツクヨミはまた、ため息をつき心の中で思った。
――ヴィクトリカの奴、上手くやったな…

第四話

ツクヨミ達は、路地裏へと身を隠した。
それは自分達の存在を見られると面倒と言う事もあるが、『鬼憑き』という存在を知られるのが最も面倒なのである。
『鬼神』の手によって殺された『鬼憑き』の死体はエクソシストの手によって処理される。その時、『鬼憑き』になった者の家族には「天の神より天罰をくらい、神に召された」と告げられる。
それは、確かな死を意味している。
もし『鬼憑き』という存在がこの世に知れ渡れば、自身暗鬼になり互いを恐れ、いずれは殺し合いが始まる可能性がある。だから、一般では『鬼憑き』と言う存在は知られていないし、知られたら困るのである。

「誰か…来た」

静かな声で、ツクヨミへと囁きかける。
別に、言わなくても分かっているのだが、リクにとっては自分にも言い聞かせているのだろう。
足音と言うものはほとんどなく、気配で察知したり、感覚でつかむしかないのだ。
気配は一つ。と言う事は相手は一人だ。
多分、先に出て『鬼憑き』の相手をするのはリクであろう。右手には既に、日本刀が握られていた。
袋から出された日本刀は鞘に納まってはいるが、リクの気持ちを代弁するかのように禍々しいオーラをまとっている。
リクの視線も一点に集中し、さっきまでのうるささが嘘のようだった。

気配がまた一歩、一歩と近づいてきた。
そして、ついに気配がすぐ近くまで来た、と同時にリクは素早く鞘を抜き駆け出した。
ツクヨミが、間違いに気付くまで一直線になんの障害もなしに影に向かい走っていく。

「『鬼憑き』…覚悟ッ！」
「・・・へ！？だ、だれだっ！！！！！？？か、か、刀！？」

影が饒舌に話し始めるのも疑問にすら思わず、リクは間合いまであと一歩のところまで来た。
影の首元へと帽子（刀身の切っ先部分）を突き立てようとする。
――キンッ！！
突如、金属と金属がぶつかり合う音がする。決して小さい音ではない。リクの刃と相殺するように力加減をいじり、わざとやってのけたのだ。
そして、それをやったのは他でもない、ツクヨミだった。
左手には、柄も刀身も短い剣…短剣を握っていた。
それはフォールディングナイフで、リクの突きをその強度も弱い短剣の刀身で受け止めていたのだ。

「相手を良く見てみろッ！！」

それは、いつもの様な静かで凛とした声ではなく、ツクヨミには珍しい大きく張った声だった。
そこで初めてリクはツクヨミの後ろにいる『鬼憑き』と思っていた影を見る。
七、八歳ぐらいだろうか、少年だった。いつもは不機嫌そうに据わっていそうな目は恐怖で涙を溜めて、ツクヨミの後ろでうずくまっていた。

「・・・誰??」
「そ、それはこっちが聞きてーよッ」

少年は、リクの呆然とした表情をじっと見つめ言い返した。
キン、と金属の音がまたすると思うと、ツクヨミがリクの刀を弾き返したのだった。呆然としていても、ちゃんと柄を握っていてその手から刀が落ちることはなかった。
フォールディングナイフを折りたたみ、再び自分の手首へとしまい込む。

「ってか、そのナイフで私の渾身の一撃を受け止めたの!!??」
「・・・は?他に方法はありません」
「ショック!!自分でも少しは強いと思ってたのに…ッ!その、フォールディングナイフって強度的には弱いから、戦闘には向いてないしー…」

頭を抱えて急に唸り始めるリクを横目に、ツクヨミは少年へと向き直った。
少年は、ツクヨミの顔をじっと見つめたあと恥ずかしそうに目を逸らした。
その場でしゃがみ、少年と視線を同じくらいにした。

「・・・怪我はない?」
「は、はい」
「・・・そう」

そういうと、リクの後頭部を軽く小突いた。
あまりダメージはないが、呆れた表情のツクヨミを見て何もいえなくなった。

「大体、途中で気付いたらどうだ？」
「だって確かに、気配はしたもん！！ツクヨミだってそうだろ！？」
たしかに、途中までは『鬼憑き』の気配を感じていた。分からなくなったのはほんの少し前。それ以前は確かな気配を感じ取っていた。
もしかしたら、たまたまここへ通りかかった少年を『鬼憑き』の気配と間違ってしまったのか。それとも、途中まで『鬼憑き』がいてどこかで方向転換をして、たまたま通りかかった少年を『鬼憑き』と勘違いしたのか…。
多分、後者だろう。
少年の気配を『鬼憑き』と間違えるほどリクもツクヨミも落ちぶれていない。
それよりも、この少年はリク達の奇怪な行動や発言を聞いてしまったわけである。
普通は日本刀なんて持ってる人もいないし、それをナイフ片手で止められる人も滅多にいるものではない。いないに等しいであろう。
「さ、さっきのナイフってどこから出したの？？」
好奇な目で少年はツクヨミを見つめる。
ツクヨミはすっ、と袖からナイフを滑らして手元へと落とす。
「ここから」
手元で握られている、ナイフを見つめながら更に目を輝かせる。
そして、身を乗り出すように問いかける。
「な、な！！おねーさんの名前は何ていうんだ？」

「私？私はリクよ！！」
「こっちのおねーさんじゃなくて、こっちの美人なおねーさんだよッ！！」
「な！！？それじゃあ、私が美人じゃないみたいじゃない！！」
「だって、実際そうだろ？？」

そう言ってレベルの低い言い争いが始まった。
しかし、やはり初めて会った人には女として見られてしまうのだろうか。
ツクヨミは女として扱われる事があまり好きではない。男として生まれたのだから、男としていきたいというのはあるが、リクのせいで若干のコンプレックスなのだ。
少年とリクの言い争いは同じレベルなので、リクの精神年齢がいかに低いかが分かった。

「・・・君の名前は？」

呆れ半分で、少年へと尋ねる。
少年は、笑顔になると胸を張っていった。

「俺の名前は、ミカエルって言うんだ！！」

第五話

ミカエル…それは天使の名前である。
四代天使の中でも一番の有力者であり、キリスト教徒とユダヤ教徒の双方に信仰されている。
ミカエルはヨーロッパでも守護天使として活躍していた。そのため、そういう変わった名前を付ける人も少なくはない。ツクヨミもそうなのだから。
自らをミカエルと名乗った少年は、じっとツクヨミを見つめる。

「なぁ、お姉ちゃんの名前は何だ??」
「僕?・・・ツクヨミ」
「ツクヨミ…??変わった名前だね?」
「・・・どうも」

ミカエルはリクの方へ目を向けて、さして興味もなさそうに言った。

「んで、あんたはリクだっけ」
「私よりも年下にあんた呼ばわりされたくないわ」
「で、で!なんでこんなところにいるんだ??リクは長い刀もって俺のこと殺そうとしたし…」
リクの手には、まだ日本刀が握られていた。その刃は、鞘に納まっておらず暗闇では輝いて見えた。
「あー!!!そうだよ、『鬼憑き』はまだどこかにいるかもしれないッ!!」

急に思い出したように、大声を上げる。そして、辺りをキョロキョロと見渡す。
ミカエルはその言葉の真意が分からず、変な人を見るような瞳で見つめた。

「・・・ねぇ、ミカエルの家ってここらへんなの??」
「え??あ、うん。すぐそこなんだー！」
「へー・・・・」

考え込むように、口元に手を当てるツクヨミ。
しばらくして、リクが何か気付いたように走り出した。

「!?」
「あれ??どこいくの」
「リクを追いかける」

ツクヨミもリクが走り出した方向へと走り出す。
てっきり、ここに残ると思っていたミカエルもついてきてしまった。
軽く舌打ちをしたが、それでも足は止めずに走り続ける。
真っ直ぐ走り、時には曲がりリクへと徐々に遠くなっていく。そして何か感じたように、急に立ち止まる。

「!!!」
「うわッ！」

ツクヨミの背中にミカエルがぶつかる。そのときに鼻をぶつけたようで、軽く鼻を押さえている。

「ミカエルは…もう来るな」
「え??」

ここまで、走ってきたのに何を言ってるんだろう??
ミカエルは最初は理解できてないようで、ツクヨミの顔を不思議そうに見つめていた。
それに比べ、ツクヨミの表情は明らかに相手を拒絶するような瞳をしていた。

「なに言って…??」
「知らない人にはついて行くな、って教わらなかったか??」

ついてくるな、と言うと走り出した。

「待ってッ!!」

ミカエルもついていこうと、ツクヨミの後を追う。
――さっきまで、ついてこれた…。
しかし、そう簡単にはいかなかった。ツクヨミはあえてミカエルがついてこれるように走っていた。まだ『鬼憑き』の気配がしなかったからだ。
だが、今になってその『鬼憑き』の気配が感じとれる。リクはいち早くそれに気付いて、始末しに行ったのだ。
ミカエルは目の前にいるツクヨミを追いかける。
そして、角を曲がったら――…

「いない…?」

そこにはツクヨミはもういなかった。
曲がったと言う可能性もなかった。逆に光の速さで真っ直ぐに走

ったと言う事もなかった。消えたのだ。そうとしか思えない。
目の前には大きな行き止まりの壁があった。

リクには確かに、『鬼憑き』の気配が感じ取られた。
ミカエルと話している時から、ちょくちょくとにおっていた。気配が自分の辺りに絡みつくような感覚に吐き気を感じていた。
そして今、確かに気配を感じ取った。場所を正確に掴む事はできないが、大体の場所は予測できる。
フォルはとっても強い。
頭の良さなら余裕でリクの方が上なのだが、技術と戦闘力はフォルが上なのだ。
強くなりたい…。誰にも負けない強さが欲しい。
リクは自分の無力さに腹を立てていた。
リク・アンダーリは侍だった。
アンダーリ家は有能で有名な侍一家なのだ。リクも例外ではない。
練習は辛く、誰もが期待し、誰もが蔑む。
何か一つ失敗すると、罰が与えられた。
暗闇の中で、三日間閉じ込められたり、ご飯を抜きにさせられたり、折檻をくらったり…。
しかし、それは侍になるためだと、教わってきたのだから仕方がなかった。
侍と言う道しか、自分の存在理由がなかったから。
リクは幼い頃から侍として生き、侍として人生を終える。そう思っていた。
しかし、違った。

『鬼神』とは、普通の人間とは違う。
普通の人間には、身体に鬼が宿っている。『鬼憑き』とはその鬼が人間の哀しみ、憎しみへと侵食し、いづれは人をのっとる。
しかし、リクにはその鬼が生まれた時からいなかった。それが『鬼神』の条件なのだ。
十歳になる頃に『鬼神』になった。
その時まで、当然のように『鬼憑き』という存在も『鬼神』という存在も知らなかった。そこにあの男―ヴィクトリカが来た。

「あなたは人とは違う」

最初はいけ好かないやつだと思った。
侍にとっては強さが一番。こんなへなへなした奴なんかに、誰がついていくかと思った。
だが、強かった。
負けたことのなかったリクにとって目の前に聳え立つ大きな壁に立ち向かう勇気はなかった。
――こいつについていけば、強くなれるかもしれない。
強くなりたかった。負けたくなかった。悔しい思いに胸を締め付けられるのが嫌になった。
だから『鬼神』になったのかもしれない。
しかし、今では人を助けたいという思いが芽生え始めていた。確かな感覚。
相手が自分に脅えていても、人を助けられた。そう思うと不思議と心が軽くなっていくのだ。
『鬼神』になってよかった。
リクは『鬼神』という存在を誇りに思っていた。
他の人が『鬼神』になった理由は知らない。相手も自分が『鬼神』になった理由も知らない。それで良いと思う。
――ここを曲がったら、『鬼憑き』が…！！

それでもリクは『鬼神』の皆が好きなのだから。
リクは思いきり地を蹴り、勢いよく角を曲がった。

「『鬼憑き』！！覚悟ッ！」

第六話

ツクヨミは迷っていた。
リクは察知能力や反射神経はずば抜けて凄い。しかし逆にツクヨミは気配こそ感じ取る事はできるが、正確な位置、場所は分からないのだ。
よく知った路地裏を駆け回り、気配だけを頼りに走っていく。
そして、ミカエルの事が頭の隅で浮かんでくる。
ミカエルの様な悲劇に合う奴は少なくはない。
しかし、ツクヨミにとってはそういうのが一番苦手なのだ。
人と同等の感情を持ちえないツクヨミだからなのかもしれない。
だからこそ、ミカエルのことを追い払う事ができたのかもしれない。

「どこだよ…ッ」

吐き捨てるように言い、路地裏を曲がる。
その時だった。
大きな音が響く。その音は、ツクヨミとリクと『鬼憑き』にしか聞こえない音…。
それは、さっきまでツクヨミが走ってきたほうから聞こえた。

「そっちかよ！」

方向転換をして、音のした方へと走る。
そこまで遠くはなかった。リクの気配も『鬼憑き』の気配もだんだんと大きくなっていく。
そして、角を曲がる。
そこには、リクと『鬼憑き』がいた。

リクはいつもの様に刀を構えて、『鬼憑き』を見据える。

「貴様を殺すッ！！」

［クキキキキ…］

『鬼憑き』は怪しい笑いをしながら顔を歪ませる。姿かたちは人間と同じだが、禍々しいオーラとその顔は人間離れしたものだった。

そして、その二人の周りは大きな空間が生じていた。不幸中の幸い、ツクヨミはその空間の中に入ることができた。

空間は『鬼神』に与えられた力の一つで、相手が意思を持った『鬼憑き』だった場合に自動に発動する。

激しい戦いの後を残さないように空間ができる。しかし、発動した『鬼神』が死ぬと自動的に開放され『鬼憑き』は暴れだす。

一種の檻の様なものだ。

と言う事は、相手は意思を持っていてとてつもなく厄介ということになる。

リクが未だに慎重に間合いを確認している理由が分かる。

「リク…そいつは」

「ツクヨミ…分かってる」

言いかけた言葉をリクがさえぎる。

柄を強く握り、真剣な面持ちで『鬼憑き』を睨みつける。

「この『鬼憑き』は強いって事だろ？？」

ツクヨミがさっき言いかけたことを代弁して言う。が、それはツクヨミの言いたいことではなかった。

「違・・・」

「大丈夫！ダメだったら、ツクヨミ援護お願いね」
「だから・・・」
「行くよッ」

そういって、刀を握り一直線に突進していく。
勢い良く刀を振り下ろす。しかし、『鬼憑き』は高くジャンプしそれを避けた。
次の攻撃が間に合わないまま、『鬼憑き』がリクに向かって蹴りを入れる。避ける暇さえ与えず、腹へと蹴りが入った。
数メートル飛ばされ、建物の壁へとぶつかる。

「ぐっ…まぢ、ありえな、い」
［クキキ…これで終わりか…？？］

『鬼憑き』はリクへと向かって走る。更に追い討ちをかけようと、拳を振り上げる。
反射神経を生かし、その拳を刀で受け止める。そして、拳を薙ぎ払い『鬼憑き』を左から切り捨てる。
『鬼憑き』は後ろへと退いたが、当たっていた様で腹からは澱みなく血が流れ出す。

「やっぱり、意思持ちは強いわ…」

姿勢を立て直すと、駆け出した。
そして、跳んだ。

「けど…ッ！！」

そのまま前方宙返りしながら抜かれた日本刀に、全体重と回転の勢いをのせて『鬼憑き』の頭部に向かって切った。

「私よりは弱い！！」

『鬼憑き』はそのまま動かなくなった。いや、意識はあっても動けないだろう。

リクの手によって『鬼憑き』の体は千々に引き裂かれていた。

「リク…」

「ふふっ…見たか、私の勇姿を！」

ツクヨミがリクになにか言う前に事は起きた。

ツクヨミの中でちらついていた影がはっきりと見えてしまった。

世界の中ではミカエルの様な人は少なくない。

同じ場面を何度も見た事がある。だからこそ、この状況をミカエルには見せたくなかった。

そのせいで、見た人は人を殺め、見られた方もその人を始末しなければいけなかった。

ツクヨミの察知能力は弱い。

しかし、感じ取る事さえできれば大体どのような人物かは想像できる。

ツクヨミの場合、気配を感じるのではなくて、波長を感じ取るのだ。だからこそ、血の繋がりだって分かるし、性格なども分かるのだ。

通路の真ん中で呆けた様に佇んでいたのはミカエルだった。

「あれ??ミカエルじゃん」

「リク…その刀って、そのために使うの?」

「は??」

リクの持っている刀には『鬼憑き』を切った時についた、血でべ

っとりだった。それを、ミカエルが血と認めているかどうかは分からないが、『鬼憑き』の屍を見ると血の様な赤ではなく毒々しい緑色の血が溢れていた。

「なぁ…お前が殺したのか？」

「これを？…私だけど」

未だに状況が理解できてないようで、ミカエルの質問に素直に受け答えする。

「ツクヨミも、見てたの？？人が殺されるところを…」

違うよね、と目で訴えかけるミカエルの心情を知ってるか、否か、ツクヨミの言葉はあまりにも残虐的だった。

「見てたよ」

ミカエルの期待は裏切られ、戸惑いの瞳はすぐに復讐の炎を宿した。

「だから…だから、さっき殺そうとしたんだね」

「何言ってるの？？あれは私が――…」

「うるさい！！！！」

リクの言葉はミカエルの叫び声にかき消される。

リクもその迫力に何も言えずに、ただその場に立ち尽くすだけだった。

「何で、父さんを殺したんだよッ！」

「！！」

そこでようやくリクは理解できたようで、驚いたように目を見張った。
そして、ツクヨミの方を見る。さっき言いたかったのはこの事だったのだ。

「ミカエル…落ち着いて！これには訳が…」
「この人殺し！！！！」

その言葉は『鬼神』にとって、一番身近な言葉で一番傷つく言葉だった。
ミカエルは直ぐそこにあった、ガラスの欠片の様なものを拾い上げる。
ガラスの欠片は、ナイフのように輝き尖っていた。リクやツクヨミなら簡単に殺せるだろう。さらに、相手がこちらを攻撃する気がないのなら特にだ。
それを持ってリクに向かって走っていく。

憎いものを見るように
汚いものを見るように
ゆっくりと
ゆっくりと
距離を縮めていく

ミカエルはそのガラスの欠片を振りかぶった。
リクは『鬼憑き』を切る事が目的であって、人を殺すのは好きではない。
そんなリクの甘い心が生んだ隙。
その隙にミカエルは入ってくる。
あと、数メートル…憎らしげな瞳とリクの視線がぶつかる。

――殺される…
そう思っていても、やはり刀を構える事はできなかった。
リクは人が殺せない。『鬼憑き』は人から堕ちた者…殺すことで救うことができるからだ。殺す事で解放できるからだ。
でも、人間は違う。
殺してどうなる??
分からない…。また自分の無力さに腹を立たせる。
それで、終わり。
あと数センチ…その凶器を振り下ろすだけ…。
リクは、目をつぶった。自分でもこんなに落ち着いているとは思わなかった。
人を殺めて強くなるのは、侍の恥だと思ったからかもしれない。
頬に生温かいものを感じる。
それを血と直ぐに分かった。
そして、それが自分のものではないことはしばらくして分かった。
痛くない…。
目を開けると、そこには血だらけのツクヨミがいた。
呆然とするミカエル。
そして、ミカエルが倒れた。
その中で、ツクヨミの血のついたナイフが輝いて見えた。

第七話

「ツク、ヨミ…？？」

ツクヨミのナイフはすばやい動作でミカエルの心臓を突き刺し、すばやく抜いた。

『鬼憑き』とは違う、純潔な赤い血が溢れ出す。

最初は苦しそうに血を吐き出したが、もう完全に息が絶えたようでピクリとも動かなくなった。

未だに呆けているリクをよそに、ツクヨミは何事もなかったようにこの場から去ろうと歩き出した。　血がついていたナイフは、もう袖の中にしまわれているのだろうか、何処にもなかった。

「どこ、行くんだよッ！！」

ツクヨミが起こした事が間違いだったかのように、叫びツクヨミを止める。

振り返ったツクヨミにはミカエルの血がこべりついていて、見慣れない赤い血に吐き気が襲ってきた。

そして何よりも、さっきまで仲がよかった人を殺したって言うのに、ツクヨミの瞳は哀れみでも悲しみでもない、ただの無機質な色をした瞳だった。

――まるで、人形の瞳みたい…

それは美しいが、恐怖を感じた。

「後はエクソシストに任せれば良い」

それだけ言うと、ツクヨミはさっさと歩き出してしまった。

リクは何も言い返せずに、ただただ先に歩いていったツクヨミの背中を見つめる事しか出来なかった。
しかし、さすがリクだろう。すぐに、自分を取り戻してツクヨミを追いかける。そして、ツクヨミの肩を掴み引き止める。

「なんで、殺したんだよッ！！殺さなくても…」
「そんな甘い世界ではないよ」

リクの言葉に淡々と冷静に答えていく。
その言葉にさらに腹を立てて、ツクヨミに掴みかかる。

「だからて殺す事はないだろッ！！」
「だったら、リクが死んでたんだぞ」

ツクヨミの言葉は正しかった。『鬼神』は数が少ない。だからこそ、一人一人の命は大切なのだ。
それに、今は大きな仕事が控えている。だからこそ、今は命を一番に守らなくちゃいけない。

「でも、説得とか…」
「あの状況でか??自分の父親を殺した相手の話を大人しく聞いてくれるか??それに、普通はそれを信じるか?」
「…でも…ッ」

言いかけたが、その先に言葉に詰まった。
しばらくの沈黙に包まれたが、ツクヨミは自分の襟首を掴んでいた手首を自分から無理矢理剥ぎ取ると、さっきと変わらない瞳でリクを見つめる。
ツクヨミの表情は変わらず無表情で、その綺麗な顔は氷のように凍てついていた。

「リクは甘すぎなんだよ」
「ツクヨミは冷たすぎなんだよッ」
「リクは、いままでこんな事があったらいつも見逃していたのか？」
「それは…」

そうだけど、と小さくもごもごと言う。

「でも、それでも、少しは相手の気持ちってものを…」
「考えた結果だよ」

それから何もいえなくなってしまった。ツクヨミの言葉は間違ってる。考えた結果が殺すなんて方法は間違ってる、って言うだけなのだ。しかし、ツクヨミはほとんだ間違った事はないのだ。
だから、リクは自分が正しいのか間違っているのか分かんなくなってしまったのだ。

「覚悟がないなら『鬼神』をやめてしまえ」
「！！」

その台詞と共に、リクの中で何かが吹っ切れた。
リクはそのぐらい『鬼神』を誇りに思っていたのだから。

「覚悟ならあるッ！！ツクヨミにそんな事言われる筋合いはない」
「・・・・・」
「大体、覚悟って言うけど普通の人間を殺す事が覚悟なの！？私たちは『鬼憑き』を殺す事が仕事なの。つまり、人を助けるのが仕事。なのにツクヨミの言ってる仕事は逆に人殺しと同等よッ」
「『鬼憑き』も元は人だ。だったら『鬼神』だって人殺しだろう？」

「でも、それはしょうがない事だよ！『鬼憑き』を殺さないと、他の人がどんどんと殺していくんだから！でも、ツクヨミは本当の人殺し――」
「黙れッ！！！！！！！！！」

ツクヨミの無機質な瞳が一瞬だけ心を持ったように見えた。
だけど、それは本当に一瞬だけ…。直ぐにさっきまでの人形みたいな瞳に戻った。

「な、なによ、そんなに怒って…事実でしょ？？」
「・・・そうだな」
「人を殺すなんて、間違ってる！！」
「・・・」

無言を突き通すツクヨミ。リクも少し怒気が下がってきたのか落ち着いてきた。
はぁ、と短くため息をつくとツクヨミは、何事もなかったようにリクに背を向けて歩いていった。

「ツクヨミッ！！！！！！！！」

リクの怒鳴り声でも、振り返るどころか、足も止めない。
それを、憎らしげに見つめていた。

「なんで、殺しちゃうんだよッ！！！！！！！！」

そう叫ぶと、やっとツクヨミは振り返った。
そして小バカにするような笑いをした。

「人を殺すのが好きだから」

その言葉はツクヨミには珍しいジョークだったが、何故かリクは背筋がゾクッっとした。
ツクヨミはいつも無表情でいるから、その妖しい笑みはあまりにも見慣れないモノだったからかもしれない。
その笑いは、微笑みというよりも薄ら笑いだった。しかし、その綺麗で整った顔にはその冷たい笑みでも似合っていた。
少し不気味染みた笑顔は直ぐに消えた。
そして、また歩き出した。

第八話

「おかえりなさい。…どうかしたのですか？」

ホームへと帰ると、いつも通りヴィクトリカが笑顔で迎えて入れた。

勉強は終わったようで、そこにフォルはいなかった。

「べっつにぃー…」

「おやおや…。そんなふて腐れてないで、話してください」

「・・・ヴィクトリカ、話したい事がある」

ツクヨミは、無表情のまま淡々と言った。

逆に、ヴィクトリカは微笑を浮かべたまま軽く頷くと、リクへ「後で聞きますよ」と言って、ツクヨミの後ろへと続いて歩いた。

「向かうのは、私の部屋ですか？？」

「それ以外にどこがある？」

「…少々、ご機嫌斜めですね」

「あぁ・・・誰かさんのせいでな」

それは誰でしょうね、と軽くとぼけると扉を開け、ヴィクトリカの部屋へためらいもなく中へと入っていく。

そして、ツクヨミがソファーへ座ると、ヴィクトリカも向かいに座った。前の時と同じ場所に座ったのだろう。

「さて、私に話とは何でしょうか？？」

「分かってるくせに・・・」

「ふふ…。さすがツクヨミですよ」
そういうと、ツクヨミの目が鋭くなる。
「リクのために関係のない人を巻き込むなんてな・・・」
「仕方ないんですよ。失わず手にいれる方法なんてありませんよ。貴方だってそうでしょう??」
「・・・悪逆無道だな」
「それは誰に言ってるんですか?」
その答えを知っているかのような笑みで、ツクヨミへと微笑みかける。
ツクヨミは視線を自分の手元へと落とす。
「さぁな」
ヴィクトリカは、席を離れ紅茶を淹れに行く。
ゴポゴポ、と水が流れる音が静かな室内へと響いた。
「でも、あの様子だとリクはもっと頑固になってしまうでしょうね…」
「ヴィクトリカのせいだ。そうしたら、もっと狂気を持つ人が増えるだろうな」
「ええ…そっちの方が『鬼神』にとっては面倒臭い事になるでしょうね」
エクソシストにとってもですが、良い匂いを漂わせた紅茶が運ばれてくる。
カシャ、という音を立てて机の上へと置かれる。
白い色の中で赤い綺麗な模様が描かれているカップに、それと似

た模様と色をしたソーサー。その近くにはシュガーが二本置かれた。
「お生憎、僕は二本じゃ足りないんだけど…」
「あぁ…ツクヨミは大の甘党でしたね」
と、向こうからもう三本持ってきてツクヨミの傍へと置いた。
その中で、四本を取ると紅茶の中へと入れた。
「それを見てると、ツクヨミの体が心配になります…」
「どういう意味だよ」
綺麗に装飾されたティースプーンを使って、紅茶をかき混ぜるとあんなにたくさん入れた砂糖も直ぐに溶けて消えた。
しかし、紅茶を飲まずにヴィクトリカへと目を向ける。
「結局、リクはどうするんだ？」
「…悪い事したとは思っているんですよ」
その面持ちにも少し翳っていた。
ヴィクトリカは手元の紅茶を口へと運ぶと、静かに呟いた。
「だけど、今回の仕事は…あの子には辛いと思います」
「そこまで、難しいのか？」
静かに頷く。
ツクヨミも紅茶を口へと運ぶ。シュガーが四つも入っているにもかかわらず、あまり甘くなかったのか五本目の袋を開ける。
「リクは真面目な子ですから、人を殺すと言うのに慣れてないんですよ…」

「・・・穢れは僕が背負うよ」

シュガーを入れながらも、それが当然かのように答える。
紅茶を飲むツクヨミを苦笑いしながら見つめ、ヴィクトリカはため息を吐いた。

「お砂糖、足りますか？？」
「・・・足りん」

相当甘いだろう紅茶を飲んでも、未だに砂糖を求める。それは、まるで子供が飴を欲しがる様にも見えた。
普段は大人びているツクヨミのそんな動作が面白かったのか、クスクスと笑った。

「なんだ・・・」
「いえ…なんでも」

さらに不機嫌そうに眉をひそめる。
席を立ち、更に五つのシュガーを置く。その中で二つを紅茶の中に入れた。

「話を戻しても…？？」
「ああ」

やっと満足のいく味が出た紅茶を飲みながら、ヴィクトリカのほうを見る。

「仕事柄、相手が殺せなかったら自分の死を意味しますから…」
「だから、人を殺すのに慣れろ、と」
「さっきも言いましたが、あの子は真面目ですから…。人を殺す行

為が間違ってると思ってますからね」
「・・・実際的にはどっちか分からないけどな」

ソーサーの上へとカップを置き、その水面に映る自分の顔を見つめた。
その顔は、どこまでも凍てついていて、なんの感情も読み取れない自分が居た。

「結局は想像しかできないんだよ…。人がいればいるほど、答えだって分かれる・・・」
「ですが、私たちにはこれしかないでしょう??」

『鬼神』にとっては『鬼憑き』は敵で、鬼などとは無縁なのだ。
普通の人とは違い、『鬼神』には体内に鬼がいない。唯一、神からの使命を下された者なのだ。しかし、そんな事は記憶にあるものなど誰一人いない。

「だから、人の駆除は僕がやる。無理矢理、リクにやらせる必要はない」
「貴方一人が穢れを背負うだなんて理不尽でしょう??」
「・・・僕はもともと穢れている」

吐き捨てるように言うと、紅茶を一気に飲み干した。
そして、その場から立ち上がり扉へと向かう。

「僕はこれで失礼する」
「理不尽ほど嫌な事はないでしょう?」
「・・・その話はもう終わりだ」
「貴方だって、本当は怖いんでしょう?」
「・・・・・・」

ガチャ、と扉を開き外へと出る。ツクヨミは振り返りもしなかった。

扉が閉まる音がすると、前の静けさへと戻った。

「そろそろ、時間がないですね…」

ヴィクトリカの独り言は小さかったが、静まり返った部屋の中へと響いた。

第九話

「おう、リクお帰り」

リクは、一人談話室のソファーに身を沈めていた。
勉強の休憩だろうか、フォルはリクの隣に座り手に持った暗記カードをパラパラとめくっていく。

「なぁ、フォルー…」
「はいはい、何でございますか？知ってますよ、七×四は二十四ですよー」
「二十八だ」
「……」

ギャグなのか本気なのか、フォルの自慢げに答えた九九は呆気なく指摘された。
しばらくの間、暗記カードを見つめてからその暗記カードを壁に向かって投げ捨てた。

「ふっ…世の中勉強が全てじゃないんだぜ？」

少しカッコつけた言い方をして、リクの方を見る。

「なー…どうしたんだぁ？？」

人さし指で、ソファーの上で寝転がっているリクの頬を突付く。
最初は気にも留めていなかったが、段々とウザくなってきたのか

フォルの指を噛んだ。
「いったッ！！な、なにすんだよ…お前は犬かッ」
今度は頭を小突いてみる。しかし、ただ深くため息をつくだけだった。
いつものツッコミがないとやる気が出ないのか、頭をかくと壁の方まで歩いていき、さっき投げた暗記カードを拾い上げる。
「やっと、九九を覚えたんだぜッ」
「さっき、思い切り間違えてたけどね…」
「俺が間違えるわけがない！！俺こそが正解なのだ！！」
「意味わかんねーよ。フォルが正解ってところが特に」
落ち込んで突っ込みはしなくても、痛いところはどんどんと衝いていく。
「知らないのか??偉い人は言ったんだぞ！！『失敗と言うものはない』と…」
「それは誰が言ったんだ??」
自慢げに言ったフォルに比べ、未だに落ち込んでいるリクは冷静に質問を投げかける。
それに、しばらく考え込むと満面な笑みで言った。
「俺！！！」
「今すぐ死んで、この世界の糧となってしまえ」
「酷…ッ！！」
そう言うと、また暗記カードの方へと目を落とし何かを呟く。辛

うじてそれが九九だと分かるが、ところどころでつっかかえる。
「そういえば、正解は??」
「あー…なんだっけ??」
「あはは!!バーカ、バーカ…ぐほっ」
フォルに言われるのが尺に障り、容赦なく股間を蹴り上げる。
急な攻撃に、守る事も儘ならずに思い切り喰らう。
「トーマス・エジソンだよッ!!」
「おぉおぉお…ッ!!!お前、この痛さはハンパねぇんだぞ…ッ!」
「しかも、『失敗?これはうまくいかないということを確認した成功だよ』って言っただけだ。変な風に覚えるな」
「だからって、これはねぇ、ぞ…」
未だに痛さに悶えるフォルを横目に、リクはまたソファーへと身を沈めた。
「はぁ…」
深いため息を吐く。
と、後ろで声がした。
「リク…話したい事があるのですが少しだけお時間よろしいでしょうか?」
「くーちゃん…」
そこにはリクがくーちゃんと呼び慕っているヴィクトリカがいた。
ヴィクトリカは少し苦笑を浮かべたまま、リクとは向かいのソファーに座った。

「ツクヨミのことですが…」
「…ツキの考えてる事がわかりません」
「お、俺にはお前の考えてる事も分からんがな…」

ふて腐れたように言うリクの横で、やっと痛みが治まったのか床に膝を抱え込むようにして座った。

「ツクヨミから色々と聞きました」
「ツキ、私の悪口を言ってた…??」
「いいえ。リクは真面目な子だと言ってました」
「そ、っかぁ」

すこし、リクの表情が和らいだように見えた。
ヴィクトリカは苦笑をいつもの微笑みに変えて、フォルへと目を向けた。

「どうです??九九は覚えられましたか?」
「一の段は完璧にマスターしたぜ!!」
「五時間かけて、一の段だけですか…。さすが、馬鹿で阿呆なフォルですよ」
「…それは、一応馬鹿にされてるんだよな?」
「いいえ、誉め言葉です」

そう言うと、照れたように頭をかいた。
リクはそれを馬鹿を見るような目で見つめた。ヴィクトリカは楽しそうにニコニコしていた。

「リクはツクヨミのことをどう思ってるんですか?」
「私は…ツキは凄いと思う。ツキはどんな覚悟も持ってる、から」

一つ一つ慎重に言葉を選んでいく。それでもリクはツクヨミのことが許せなかった。

「覚悟とは…どんな覚悟でしょうね」

「分かんないもん」

「そうかぁ？？…案外簡単なものかもしれねーぞ？」

パラパラと暗記カードをめくりながら、フォルは口から勝手に出たかのようにいつも通りに言った。

「フォルなんかに分かるわけないだろ…」

「俺なんかに、って何だよ…。でも、ほら深く考えすぎなんだよ。もっと、単純な答えなんじゃねーの？」

リクは考え込み始めた。が、何も浮かばないようで頭を抱え込んだ。

そんな様子を見て、呆れたように見つめる。

「なによ…」

「いんやぁー、べっつにぃー」

「何様だよ…」

「俺は、常に俺様だッ」

「だからなんだって言うの？」

「あれ、軽くスルー？？…だぁかぁら、もしお前がツクヨミの立場だったらどうするんだよ」

リクに向けられた視線をヴィクトリカへと向けると、ヴィクトリカは子供の答えを期待して待っているように見えた。

――ヴィクトリカの奴…これでリクが答えを出さなかったら俺は

しらねーぞ…
フォルは心の中でそう呟くと、暗記カードの方へと集中した。
「…ツキの立場だったら…。ヴィクトリカならどうする？」
「さぁ…分かりませんね。でも、きっと助けるとは思いますよ。リクはどうなんですか」
「私は――」
また考え込むと、急に立ち上がった。
「ツキの所に行ってくる！！」
「…いってらっしゃい。今はきっと部屋にいるでしょう」
頷くと、談話室から走って出て行った。
ヴそれを見送ると、ヴィクトリカは二の段を覚えているフォルの暗記カードを取り上げるとニコッと微笑んだ。
「さて、フォル。一の段から九の段まで言ってみましょうか」
「俺まだ、言えな――…」
「大丈夫です。言えなかったら今日の晩御飯を抜きにするだけですから」
「黒…ッ！！最悪だな！」
「あ、誉め言葉ですか？」
「違うわッ！！」
それでも笑顔を絶やさないヴィクトリカ。
さっきのリクのように若干、ふて腐れているフォル。
「では、言ってください」

言われたとおり、一の段からゆっくりと言っていく。
そして二の段に差し掛かる時に、フォルの口は止まった。

「どうしました??口が動いてませんよ」
「…ヴィクトリカさ、リクをあんな事にしちゃって仕事に支障が出たらどうするのさ」
「！！！！」

ヴィクトリカは今の言葉が衝撃的だったのか、目を大きく見開き驚いた。

「いや、そこまで責めてるわけじゃ――」
「素晴らしい！！」
「――ない……は??」
「まさかフォルが『支障』という言葉を知っているなんて…ッ」
「そっちかよッ」

フォルの知識は小学二年生以下…支障という言葉が出るとは思わなかったのだろう。
さらにふて腐れたように、膝の中に顔を疼くめる。

「…取り返しつかなくなったってしらねーぞ」
「大丈夫ですよ。後はツクヨミが何とかしてくれるでしょう」
「毎回思うんだけど、ヴィクトリカってリクは気にかけるけどツクヨミのことは気にかけないよな。信頼しきってる、っていうのか??」
「信頼と言う言葉も知ってるんですね?」
「…さすがに怒るぞ。
…ツクヨミだって強いのは分かるぞ。リクに負けないくらい真面目だし、頭だって良い。欠点なんかないって感じだ。…でも、ツク

ヨミだってまだ子供だぞ??少なくとも俺たちよりは」
「ツクヨミは特別ですから」
「それに、ツクヨミって謎だよなー…。笑わないしさ。あいつに初めて会った時なんか鳥肌たっちまったしよー」

ブル、と震える仕草をする。

「あの子はかわいそうな子ですから」
「かわいそう??同情か??」
「違いますよ。ただ…」
「ただ??」

そこで区切るとヴィクトリカはフォルへと笑いかける。

「さて、二の段をやりましょう。ご飯を賭けたとっても大事な勝負ですよ」
「誤魔化しやがって…。ま、言いたくないなら良いけどな」
「あまり触れられたくはありませんね。私ならまだしも、ツクヨミにも関係しますから」
「…」

二人の間には重い沈黙が流れる。
その沈黙を破ったのは、空気が読めないフォルだった。

「じゃあ、俺も九九のこと触れられたくないんだ」

第十話

薄暗い部屋の中で、ツクヨミは窓際に座っていた。
窓に背を預けて、空を見上げていた。
コンコン、と扉を叩く音がその暗い部屋に鳴り響いた。

「リク…だけど、少し良いかな？」
「・・・開いてるよ」

それだけ言うと、扉の軋む音とともにリクが入ってきた。
少しだけ気まずそうに笑いながら、部屋の電気をつける。

「目、悪くするよ…」
「・・・そう」

それでも、まだ溝はあって沈黙が続く。
ツクヨミは窓際から動こうとせず、リクはツクヨミがいつも使っているベッドに腰を下ろした。
何か言いたそうにツクヨミのほうへと向くが、ツクヨミは空にあるかけた月からは目を離さなかっ　た。
そして、言おうとしては口をつぐみ、視線を泳がせるのだった。

「…ツキ、あの…さ」
「・・・・・・」
「今日のことだけどッ」

少し、声を張り上げて言うとようやくツクヨミはリクの方へと見た。

リクは少し緊張気味にツクヨミに問いかけた。

「ツキの覚悟って、何??それと、何で殺したの??」

「・・・」

また、沈黙が流れ始める。

――何も言わないつもりかなぁ…。

リクの心には、少し不安があった。まだ怒っているかもしれない。飽きられてるかもしれない。

自分は相手を許せないし、怒ってる。だけど自分はそうさせられるのが嫌いなのだ。

自分の中の矛盾…。

リクの心の中は矛盾だらけなのだ。

「・・・僕の覚悟は、ない」

「ない??だって…」

「もともと、僕は『鬼神』になる資格のないものだからな」

自分の中にあるモヤモヤを取り除こうとツクヨミのことに来たのに、ますます疑問が浮かび上がるばかり。

うーん、とうめき声を上げているリクを眺めながらツクヨミは更に続けた。

「リクは、何故『鬼神』になった?」

「それは…」

分かってる。強くなりたい、人を助けたい。それで『鬼神』になった。

しかし、今のリクはそれが本当の心なのかすら分からなかった。偏見だけかもしれない。それは良い様に見られたくて思ってるかも

しれない。
だからこそ、すぐには言えなかったのかもしれない。
「私は、強くなりたかった…。それに『鬼神』をやってて、人を助けられるというのがとっても嬉しかったから、だと思う」
「・・・良いと思うけど」

ツクヨミから返ってきた言葉は、リクにとっては意外なものだった。
驚いた表情でツクヨミを見ると、ツクヨミは笑っていた。
この前みたいな薄笑いじゃなく優しい微笑だった。
しかし、前と同じですぐに元の無表情に戻ってしまった。

「僕は『鬼神』になった理由もない…」
「…？」
「ただ僕には、覚悟もないから全部捨てられる」
「…??もっと、わかんないよ」

そうかもね、ツクヨミは窓際から立ち上がり、リクの方へと歩いていく。
ベッドに腰掛けているため、ツクヨミがリクを見下ろす形になっている。

「リクは『鬼憑き』は嫌い??」
「なんで？」
「・・・どっち」
「き、嫌いだけど…??」
「だよね」

そういうツクヨミの顔は無表情だが何故か、悲しそうだった。

だけど、リクは自分の疑問に答えるのが精一杯でそんなツクヨミには気付かなかった。

「ツキはどうなの？」
「・・・僕は…」
「うん」
「どうだろうなぁ…」

頭を掻きながら、リクの横に腰掛けた。
そのままベッドに寝転がると、自分の胸に手を置いた。

「分かんない…。リクは何で嫌いなの」
「それは…人を殺すし、襲う」
「・・・それだけ？？」
「家族も『鬼憑き』に殺された…」

憎いものを思い出すように、顔を歪めた。

「『鬼憑き』に、ねぇ・・・」
「私が『鬼神』になってしばらく経った後かな？…ヴィクトリカが教えてくれた」
「ふーん・・・」

だから…、リクの心はさっきの不安でなく確かな決意があった。

「私は、強くなって『鬼憑き』を全員この世から消してみせるッ！！」
「…――じゃあ、僕たちは敵なわけだ」
「へ？？なんか言った？？」
「・・・何でも」

ツクヨミの小言はリクに届くことなく、ツクヨミの心の中へ響いた。
それから、また姿勢を直しリクの顔を下から覗き込む。
「で、答えは出た？」
「んー…微妙」
「そう…。焦らなくても大丈夫だよ」
まだ時間はある、と言うとベッドから立ち上がり扉まで歩いていく。
リクもそれに連れられ、ツクヨミの後についていこうとして、止めた。
「ツキ…」
「何ですか？」
「今日、ごめん…怒っちゃって」
「怒るのは当然だと思うよ」
「でも、悪いコトした…」
ツクヨミは扉から離れリクの元へ行くと、リクの背中を押して扉まで連れいていった。
「リクが許してくれるならそれで良いよ・・・」
「ありがとッ！！」
リクは振り返り、思い切りツクヨミを抱きしめた。
そこには今日、ホームに帰ってきてようやくリクの笑顔があった。
「ハイハイ、リクは僕が男って分かってますか??」

「…気にしないのさー」
「え、何??素で忘れてた??」
「…うふッ★」

はぁ、とため息をつき、自分に抱きついているリクを引き剥がす。
そして、部屋から出て行く。

「あー!!待ってよおおぉ!!謝る、謝るからさあああぁあ…」
「謝る前に、何故忘れる・・・」
「そんなの、ツクヨミの容姿が悪いんだからッ」

そんな言い争いをしながら談話室へと向かう。
リクの小言や謝罪を全て無視しながら、談話室へと入っていく。

「ねぇ…ごめんってばあぁぁ」
「あー…何も聞こえません…」
「あー!!酷いっ!」

そのまま、ヴィクトリカの向かいに座り、泣きながら未だに二の三でつっかかえているフォル見る。

「・・・何してんの??」
「お勉強です」
「虐められてます…」
「ツキってばあぁぁ!!」

フォルは手を使いながら、掛け算ではなく既に足し算をしている。
ヴィクトリカはそれをニコニコ眺めながら、リクの頭を撫でていた。
リクはヴィクトリカにツクヨミの小言や部屋であった事を報告し

ていた。
ツクヨミは何もせずに、ただ皆を眺めていた。
――少しだけ・・・残された時間はあと少し…。
誰にも気付かれないように、ツクヨミは自分の心の中で呟いた。

第十一話

「おっはよーーーーッ」

朝、目が覚めると例の如くリクが目の前にいた。
ツクヨミは寝ていたから、リクが上に圧し掛かっている状態だ。
ツクヨミは、朝に弱い。だから、大体起きるのは昼ごろだし、起きていてもボーっとしている。
そのため、人に起こされるのがあんまり好きではない。寝たいときに、寝る。それが、ツクヨミだ。

「・・・今、何時か分かってる??」
「朝の八時だけど??」
「そうだねー。うん、おやすみ」

そう言うと、また布団を深く被り眠りにつこうとする。それを阻止すべく、リクはツクヨミの身体を揺らす。

「おきてよー!!」
「いやー…ッ!!」

布団の裾を強く握り捲くられまいと踏ん張るツクヨミと、必死に起こそうとするリク。
どうしても寝たいのか、いつもと違いなかなか折れない。

「なぁんで、起きないの!!」
「なんで、って・・・フォルのせいだよッ」

頑として布団から手を離さないので諦めたのか、ツクヨミの傍へと座った。

「フォルのせい??」
「そうです、フォルのせい、です・・・」

だんだんと声が小さくなっていく。
リクは少し考えると、思い立った様にツクヨミの部屋から飛び出していった。
やっと安心したのか、ツクヨミはまた眠りに落ちた。
しかし、そんな安楽の時はすぐに消え去った。

「ほら、ツキ」
「んぁ・・・」
「なんで、俺がツクヨミの部屋に連れてこられてるんですか??」
「フォルのせいでツキが寝不足だからです」
「俺のせいって…やっぱ昨日のアレですか??」
「多分、アレです」

フォルは苦笑いを浮かべると、寝ているツクヨミの頬を突く。
そしてフォルが頬を突いた途端にツクヨミは素早く目を覚まし、フォルの首へとナイフを突きつけた。
それは余りにも早くて、反応すら出来なかった。

「おぉッ!!た、タンマ!!俺、俺だよー」
「・・・・・・誰だっけ??」
「相変わらず、寝起きは悪いなぁ。でも、俺のことを忘れるなんて最悪だぜ」
「まあ無理もないよ。昨日はフォルのせいで夜、寝れなかったんだから」

「いや、あれは半分はヴィクトリカの…」
「いや、あれは確実なるフォルのせいだ」

あの後、フォルは九九が二の段から言えなくてヴィクトリカから罰を喰らった。
晩御飯を出す代わりに今日中に九九を全部覚えると言う事だった。
そして、ツクヨミはそのフォルの巻きぞいをくらい、九九を覚えるまで寝かせられることなく、ずっと夜が明けるまでフォルに付き添っていた。
フォルが九九を全部覚えたのは、夜が明けてから…午前四時ぐらいだったろう。
夜行性でも朝に弱いツクヨミにとっては半分地獄だっただろう。

「まあまあ、このナイフを退けてあげてくださいな」

リクがツクヨミに言うと、大人しくナイフをたたみ袖の中にしまうと、また布団の中に潜った。

「あー!!また眠ろうとするうううう!!」
「・・・眠いんです。玩具なら、すぐそこにあるでしょう…」
「え??俺って玩具??むしろ、いじられるだけ?放置??まさかの放置??」
「フォルって着せ替えしてもつまらないもん!!」
「いや、そりゃ男だからよ…」
「・・・僕だって、男だぁあああぁぁぁぁぁぁ…」

もうだんだんと自棄(やけ)になっていくツクヨミはいつもと違い、服装は白のブラウスに短パンという簡単な服装だった。
リクはそれに気付くと、ツクヨミの布団を剥ぎ取った。少し油断していたようで、布団はリクの手によって綺麗に奪われた。

「ぅー・・・寒いよー…」
「つ、ツキが白い服着てるー！！！」
「そりゃ、着るだろうよ…」
「何言ってるのよ！！ツキがあまり白好きじゃないって知ってるでしょー！？」

ツクヨミは普段、黒や灰色などの暗い色しか着ない。だから余りにも珍しかったのだろう。
少なくともツクヨミは『鬼神』になってから白を身につけたことは数えるほどだろう。

「ねー、なんでなんでー？？」
「ぅーん・・・ねかせろおおおぉぉおお」
「止めとけ。この様子じゃあ相当眠いんだろうよ…」
「うー…！！」

少し、唸ると諦めたように手に持った布団をツクヨミにかける。
それを深く被るとまたツクヨミは眠りについた。

「これじゃあ、子供みたいじゃない！！」
「いや、ハッキリ言って俺たちよりも年下だろ…」
「…ツキって何歳だっけ？？」
「……人を年齢で見るなんて最悪だぞッ」
「あ、分かんないのね」
「いいや、ワカル！」
「そー…じゃあ、私の年齢も分かるよね？」
「うぐッ…当然だよ」

フォルは胸を張って言い張った。しかし、その目はどこか泳いで

いた。

「じゃあ、何でしょう」
「・・・じ、十六？」
「ほぅ…私がそんなにと歳魔に見えるのか…？」
「ジョーク！！冗談だよ！！十五だろ！！分かってるよ！」
「チッ…」
「なんで、舌打ち！？」

フォルを哀れな目で見つめると、フォルはツクヨミの部屋から出て行った。
リクもそれに続いて部屋を出て行き、扉を閉めた。
無機質な部屋に、ツクヨミの声だけが聞こえた。

「僕は十六歳だっつーの・・・」

そして、また眠りについた。

ツクヨミが目を覚ましたのは、午後の二時だった。
枕元で携帯のアラームが鳴り響くと、壊したいという衝動を抑えつつ携帯を手に取る。
携帯を開くと、画面にはメール一件と出ていた。
神妙な顔つきでメールを開くと、急に驚いた表情を見せた。
早い動きでベッドから飛び降り、着替えもせずに廊下を歩いていく。

建物の内装はは黒色が多いため、その白髪もブラウスも目立っていた。しかも普段落ち着いているツクヨミが焦ったように走っているのだから尚更だろう。
談話室の中からリクとフォル、それからヴィクトリカの声がする。

「あ、ツキやっと起きたのー??」
「おぅ、おはよー。今なら俺が誰か分かるよな?」
「おはようございます、ツクヨミ」

いつも通りに挨拶を済ませる三人。
ツクヨミはその中でヴィクトリカに向かって携帯を突きつけた。

「…??何でしょうか」
「これは、貴様の仕業か??」

ツクヨミの手から携帯を取ると、目を通す。
すると、ツクヨミ同様にヴィクトリカも驚いた表情を見せた。

「これ、は…!?」
「・・・貴様じゃないのか」

ヴィクトリカから携帯を奪うと、ポケットの中へとしまいこんだ。

「しかし、これは一体…??」
「知るか。起きたら入っていたのだから」

投げやりに答えながら、ソファーへと腰を下ろす。

「何、何??何の話ー?」
「リクには関係ない話だよー・・・今はね」

「今は??」
「そう、今は。これからの展開によって関わるかどうかわかんない話・・・あー、エリザ!!!」

ツクヨミはソファーに座りながら、向こう側にいる女性に声をかけた。

「ハイ、なんでしょうか??」
「ビール一つ・・・」

笑顔で注文を受け取ると、奥の厨房へと走っていった。

「朝からビールかよ…。おっさん臭ぇーなぁ…」
「朝っぱらから叩き起こされたり、ケンカしたり、休日なのに『鬼憑き』と戦ったり、とってもバカな野朗の九九を覚えるのに付き添ったり…そのせいでストレス溜まってるんですよー」
「…悪かったな」

そんなやり取りをしていると、厨房の女性―エリザが缶ビールを一つ持ってきた。

「はい、どうぞ」
「ありがとー」

エリザは薄茶色の神を腰まで伸ばしていて、清潔さを思わせる白いエプロンを着ていた。
ヴィクトリカが優しい顔立ちなら、エリザはおっとりとした感じだ。今で言う癒し系タイプ。
ツクヨミはエリザの手からビールを受け取ると缶を開け、口に含んだ。

「ツキいいぃ、未成年は飲んじゃダメだよー」
「・・・知ってる??ストレスってタバコ吸えば少しは楽になるんだって…」
「うん!!!ビールいいとおもう!!凄いいいと思う!」
「いや、いいのかよ!!」

クスクス、とエリザは笑った。
エリザは普通の人間で心に鬼を宿している。
しかし、エリザの様な人は少なくはない。この『鬼神』のホームにもエリザのように普通の人間だっている。
それは『鬼憑き』に両親や恋人、大切な人をなくし、行き場を失った人がこのホームで生活している。
ここに居る人間は全員が全員『鬼神』を好きなわけではないが、大勢の人がホームで生活するために、雑用などの類をして『鬼神』の手助けをしている。

「で、携帯の相手は誰だったの??それぐらい教えてよー」
「…無理に聞き出そうとすなッ!」
「いいよ、別に。名前ぐらいなら…」

そう言って、ツクヨミはビールを少量口に含んだ。

「・・・Ｖｉｎｃｅｎｔ」

第十二話

「…ヴィンセント??」
「意外と普通の名前だなぁ…もっとこう悪魔とか天使とかの名前だったら、インパクトがあるのに」
「・・・そんなもの誰が求める」

くだらないものを見るような目で、フォルを見つめる。
ポケットから再び携帯を取り出すと、ビール片手にいじり始めた。
リクとフォルはツクヨミの次の言葉を待っているのか、何も言わない。ヴィクトリカだけが険悪な顔つきになっていた。

「・・・僕たちが思っていた以上に、残された時間は少ないのかもしれない」
「そうですね」

そして、また携帯をしまうとエリザがツクヨミをじっと見ているのに気がついた。

「…どうかした?」
「あ、いえ!!そのぉー…」
「ほらほら、エリザもそのヴィンセントのこと気になるよねー!!」
「あ、そっちじゃなくて…いえ、そっちも気になるんですけどッ」
「??」

あの、と口をもごもごさせながらツクヨミの洋服を指差した。
リクはそれでエリザの言いたい事がわかると、大きく頷いてツクヨミに突っかかってきた。

「そうそう、なんで今日の服は白色なの??」
「あー・・・そういえば」

そういうと、空っぽになったビールを机の上に置くと、ソファーから立ち上がった。

「??どこいくのー?」
「着替えてくる・・・」

そういうとリクはツクヨミの背中を捉え、強制的にソファーに座らせる。
行動が意外だったのか、不思議そうにリクを見る。しかし、あまり表情変化はわからず無表情のままだった。

「・・・リク、何す――」
「着替えちゃダメーッ!!白なんて、似合わないと思ったら違うよ!!」
「・・・は??フォル…」
「残念な事に、今日は俺もリクに賛成だな…」
「どうゆうこと??」
「ふふふ…ツクヨミ、諦めた方が身のためだと思いますが」
「?ヴィクトリカまで何を?」

リクは不気味な笑いを口から漏らすと、ツクヨミの身体を動けないように固定した。
そして、フォルに合図を送ると、フォルがツクヨミの身体を押さえつけた。
エリザはきょとんとしながらその光景を眺め、楽しそうに笑っているヴィクトリカとツクヨミの顔を交互に見ていた。

リクは、一時的に場所を離れると、すぐに何か持ってきた。リクの部屋はこの談話室の隣に設置してある。
談話室は防音のため、外に音は漏れないがツクヨミは人がいるところは余り好まないので、少し離れたところにある。

「な、なに??」
「こーんな、貴重なツキはなかなか見れないよ!!しかも寝起きだから、特にね!」
「??ちょ、何??」
「大丈夫!!服は変えないよ…服は」
「は!?」

リクはツクヨミの頭にスプレーで何かを吹きかけた。そして、鋏で何かを切る音も聞こえた。
ツクヨミが暴れようとすると、フォルが強く押さえ込む。

「ちょ…やめッ」
「良いじゃないか!!こんな可愛いのがいけないんだよ!!」
「そういう問題じゃ・・・」

今度は、コンタクトをツクヨミの瞳につけた。左の次は、右にと均等にやった。

「痛ッ・・・」
「あ、ごめん!!ずれた??」
「いや、大丈夫だけど・・・まずこの状況が大丈夫じゃない」

その言葉は無視して、ブラウスの上のボタンを二つほど外した。
ヴィクトリカはニコニコしながら見てて、エリザはさっきとは違い、少しだけ頬を染めて上気した顔でツクヨミを見てた。

「ハイ、終わりー！ね、簡単でしょ？？」
「簡単の前に、何をやらせれるかもやらされたのかも理解できてません」
「おぉ！！ツクヨミが可愛くなってる！！」
「はぁ・・・？？」

リクがツクヨミの前で鏡を見せる。
ツクヨミは自分の顔を見た。白髪は緑色に染められていて、瞳も緑色だった。
左右の長い場所も綺麗に切れていた。

「可愛い！！！可愛いよッ！！！ツキ、結婚して！！」
「何を言ってる、女同士で結婚などできるかッ」
「・・・僕は男だ」

切られた場所を惜しそうに眺め、ため息をついた。

「…？？やっぱり、切ったらやばかった？？」
「・・・切ってほしく無かったです」

リクは、そこでようやくいけないことをしたと気付いた。

「ごめ・・・」
「終わってしまった事だ。別にいいよ…」

リクが謝ろうとするのをさえぎる。
それでも少し、罪悪感の欠片がリクを困らせた。
それを誤魔化すようにツクヨミは髪をいじり始めた。

「これは・・・スプレーで染めたの？」
「うん…。ツキに合いそうだったから…」
「もともと、僕のためかよ」

呆れたようにため息をつく。

「んで、これはすぐに堕ちるの？？」
「・・・・・てへっ★」

誤魔化すように舌べろを出しウインクをする。
オイ、とフォルは軽くリクの後頭部を小突いた。

「・・・何ヶ月で落ちるの？？」
「約三ヶ月ぐらい、かな」
「三ヶ月って…もう仕事始まってんじゃねーか！！」
「でもでも！！でもだよ、白髪って今時珍しいじゃん！！どうせ染めちゃうのなら、今のうちに…みたいなさぁー」

ツクヨミは頭を抑えた。

「はぁー…頭が痛い・・・」
「だ、大丈夫ですか？？お水を…」
「大丈夫・・・ある意味コイツ等が原因だから」

人差し指でなく、親指でリクとフォルを指す。
エリザは困ったような苦笑いを浮かべ、ツクヨミをジッと見つめた。
心なしか、少し頬が赤かった。

「エリザ？？」

「い、いえッ！！なんでもっ」

若干、声が裏返りながらもエリザは全力で否定し、ツクヨミから目を逸らした。

エリザにとっては、自然に返したつもりだろうが、あまりにも不自然だった。

そこで、ツクヨミはボタンが開いていることを思い出し、急いで閉めた。

「えー！！なんで閉めちゃうのさ～」

「あける必要がどこにある・・・」

「お色気だよ！！お・い・ろ・け！！」

グッと親指を立てて見せた。フォルが後ろで頷いているのがとても気になる。

するとリクは、ツクヨミの顔を見つめて、呟いた。

「…黒も似合うな」

「いや??まだやるつもり?それに、黒は・・・」

「嘘だよー！今日はやらないってば」

「今日は、って・・・」

あと、残りの五日間をこんな事をして過ごすのかと思うと、少し気が重たくなった。

「ま、制服はセーラー服・・・いやブレザーだよね！！」

「・・・ちゃんと、男物だよね??」

「いや、女物」

「無理、絶対に無理！」

「いいえ！！ツクヨミさんはセーラー服でも十分イケますよ！！」

何故か、強く拳を握り、そして強く言い張るエリザ。
一瞬の沈黙。

「あ、あはは！エリザは面白いなぁー！！リクよりずっと」
「私よりとは何だ！！」
「そのままの意味だけど？」
「割り算もできない阿呆が何をぬかす」
「割り算はできなくとも、計算機がある！」

リクはいつものようにバカを見る目で見ていた。
そして、エリザはいつも通りの苦笑いを浮かべていた。
ヴィクトリカは紅茶を飲みながら、皆を眺めていた。
ツクヨミはまだ鏡で自分の髪を惜しそうに眺めていた。

「うん、いつものフォルだ！！だから、死ね」
「うわ、酷ッ！！明らかに扱いがいつもより酷いよね？？」
「じゃあ、ここはソフトにタヒの方が良かった？？」
「た、ひ…？？それが何処が悪口なんだ？」

リクは心の中で思った。
――コイツはバカだもんな…。うん。
フォルにたいしての確かな同情が生まれた瞬間だった。

「ま、いいや。ツキの黒髪はこんどやろう！！」
「やらなくていい、ですッ」

第十三話

「では、忘れ物はありませんね」

あの日から五日経った日。
ツクヨミたちはグリニカへと派遣される。
『鬼神』達が派遣された先では、少し多きめの家で暮らすことになる。
今回の場合は三人で一つの家に住み、学校に行きながら『鬼憑き』退治をする事になる。

「はーい！！ありません！」
「俺もないっす」
「暗記カードは持ちましたね？？」
「こんな年齢でまさか勉強を覚える事になるとは…ッ」
「では、今回の任務の見直しをします」

はい、と三人の声が重なる。
ヴィクトリカは満足そうに頷くと、真剣な表情になった。

「今回の任務目的は『鬼憑き』の討伐。依頼人は聖ハーウィル学園の学園長、ハサウェイ様から」
「そこまでＯＫですよー」
「そうですね。今回の任務隊長はツクヨミ。副隊長はリク・アンダーリ」
「三人なんだから、隊長だけで良いと思うがな」
「何を言う！それだから、馬鹿は…」
「んだとぅ！！？？」

フォルとリクの口論が始まる。
苦笑いしながらも、ヴィクトリカはツクヨミの耳元で囁いた。
「一応、大丈夫だとは思いますが、気をつけてください」
「・・・分かってる」

それだけ言うと、口論をしているリクとフォルの間に入り、行くようにと促した。
リクは先に歩いていったツクヨミの横に並んで歩き出し、少し遅れたフォルがついていく。

「いってらっしゃい」
「いってきま～す」

ひらひら、と手を振ってリク達を見送る。
顔は笑っていても、その瞳は少し、不安が混ざっていた。

深夜発の汽車に乗ったツクヨミたちは、明日のためにすぐに眠りについた。
そして、起きたのは朝の六時。ツクヨミにとっては熟睡タイムのど真ん中である。
朝からテンションの高いリクを落ち着かせ、フォルを叩き起こし、到着駅の『聖ハーウィル学園前』で降りた。

「はぁー…長かった」
「あ、フォルは車に弱いもんね」

汽車の中で、フォルは乗り物に酔い、何回か嘔吐しそうになっていた。
一番早く寝たのはきっと、フォルだろう。
「んにしても、でけぇなぁー…」
聖ハーウィル学園はフォルが言ったとおり大きく聳え立っていた。
西洋系のお城を、学校にしたみたいに綺麗で、大きかった。
「まあ、とりあえず学園長に会わなきゃ意味ないよ」
「・・・行くぞ」
学園に入ろうと門の前まで差し掛かると、甲冑を身に纏った門番が二人いた。
その二人は、ツクヨミたちが中に入ろうとするのを阻止した。
「何者だ」
「私たちは、この学園長に呼ばれていて…」
「何も聞いてないぞ」
「でも、この学園長が私達呼んだんだもの！！」
「小娘が…そう言って侵入する者も少なくはない」
「事実は事実でしょ！？」
門番は手に持った槍をリクに向けた。
しかし、リクは驚きも脅えもせずに門番を睨みつけた。
「何の真似だ」
「口の減らない餓鬼め」
「今じゃ、餓鬼の方が素直で可愛いと思うけどね」

相手を見下すようにリクは門番に言った。
門番も苛立ちが隠せないようで、憎たらしい目でリクを一笑した。
「門番の言う事聞かないやつは、門番達の手で駆除して良いって知ってるか??」

そう言うと、門番の槍がリクの頬をかする。
リクの頬からはリクの血が頬を伝い、流れ出した。
すると門番達は、互いに顔を見合わせゲラゲラと笑った。
リクの刀は刀袋に仕舞われていて、出すのにも少し時間が遅れる。
それに、下手に抜刀したら嫌な奴でも簡単に黄泉に送れてしまうのだから、抜刀するのにも気が気ではない。

「どうした、お譲ちゃん?顔が真っ青だぜ??」
「五月蝿い!貴様らの様なゴミ蟲には興味ない!はやくハサウェイを出せ」
「学園長を敬う気持ちがないのならば、それこそ死んでもらうぞ」
「ふん、貴様らの手によって私が殺せるわけないだろ」

門番の顔が余裕を消し、怒りに変わる。
「いいだろう、ここで殺してやるよ!」

そう言うと、門番は槍を高く振り上げ、リクに向かって振り下ろそうとする。
しかし、リクは何にも動かずに、ただ冷えた目で門番を一瞥する。
「クソ餓鬼がぁッ!!」

門番が振り上げた槍がリクに向かって振り下ろされる前に、ツクヨミが動いた。
速い動作で門番の槍を切ると、ナイフの先を首に突きつけた。
「門番、お前には興味がない。僕等に支障が出るのなら、今すぐ消すぞ」
ツクヨミの目は本気だった。自分達の邪魔になるのならどんな犠牲も問わないのだ。
門番は舌打ちをすると、門を開けた。
ナイフをたたみ、袖の中へしまうと躊躇いもなく門をくぐる。
その後に続いてリクとフォルも門をくぐった。
先頭に歩いているツクヨミは急に立ち止まると、目の前にいる人を見つめた。

「どうしたの、急に??」
「おい、リク…学園長だぜ」

三人の目の前には、おっとりとした雰囲気を醸し出す白髪(しらが)の老人がいた。
リクは意外そうな顔をした。
「うそー?もっと意地悪そうな人かとおもったぁ」
「ははは…よく言われるよ」
学園長――ハサウェイはニコニコ笑いながら答える。少し、ヴィクトリカに似ているかもしれない。
ハサウェイはツクヨミの方を見ると、頭を下げた。
「お久しぶりです、ミク様」

「・・・久しぶりだな」

二人の間には微妙な雰囲気が流れる。

「え??知り合いなの??っていうか、ミクって誰?ツキはツクヨミだよねー?」

「・・・ツクヨミだよ」

「じゃあ、あの人は誰の事言ってるの?」

「リクのことを間違えてかんじゃったんだよ」

「…おぉ!!ドジっ子さんか」

――この子が馬鹿でよかった…。

ツクヨミは再び歩き出すと、ハサウェイも自分に着いて来る様にと、歩き出した。

フォルはまだ状況が理解できていないようだったが、ツクヨミたちが先に歩き出してしまったので急いで歩き出した。

「・・・今はツクヨミって名前なので」

「ツクヨミか…すまないな」

「いえ、癖はなかなか抜けないものですから」

「そうか。しかし、ツクヨミか…それはセレーネーと関係はあるのか??」

「・・・はい。月がなくては僕は存在する理由すらないんですよ…」

ハサウェイは少し笑うと、リクのほうを見た。

「すまんな、門番は少し頭に血が上りやすい」

「あーいや、大丈夫です。『鬼憑き』に比べたら可愛い方ですよ〜」

「オニツキか…」

「??」

いや、と言うと高そうな校舎の中を入っていくと、エレーベーターへと乗り込む。
リクは初めて乗るのか、少し緊張気味だった。
「学園長室は五回にあるのでね」

第十四話

学園長室は、とても広かった。
ハサウェイは座椅子に腰掛けると、前を向き直った。

「わざわざ来て頂いて、誠に有難う御座います。最近、この学園で不思議な死に方をする人が増えてきました」
「・・・そしてエクソシストが来た、と」
「はい」

エクソシストは『鬼憑き』の処分、御告げ者とされる。

「まあ、そこらへんまでは俺らも分かってるさ」
「とりあえずー、この学園にいる『鬼憑き』を全員始末すればいいんでしょ？」
「そういうことになるの」

ハサウェイは、机の上においてあるダンボールをツクヨミたちの前に差し出した。

「・・・これは？？」
「君たちの制服だよ…」

一番最初にリクが駆け寄り、そのダンボールを開ける。
中には、女物の制服が一つと男物の制服が二つ入っていた。
リクは自分の女物の制服を手に取ると、自分に合わせてツクヨミたちを振り返る。

「どう！？似合う？」
「おー、着てみなくちゃ分からんが、まあ似合うんじゃねぇか？」
「そっかぁー！じゃあ、着替えてくるー」

そういうと、リクは制服を持って学園長室から出て行った。

「・・・リク、着替える場所知ってるのか？」
「…知らないだろ…」

フォルも制服を二つもつと、一つをツクヨミに、もう一つを抱えて学園長室から出て行く。

「ま、すぐそこにあるんじゃないか？…先、いってるぞー。お前も早く女子更衣室で着替えてこいよー」
「・・・あぁ」

――アイツ、僕の性別理解してないだろ…。
内心そう思いながらも服を持って部屋を出ようとした。

「ミク…ではなくて、ツクヨミだったか…」
「・・・なんでしょうか」

振り返り、ハサウェイへと向き直る。
少し言い渋ると、意を決してツクヨミの目を見つめながら言った。

「ツクヨミは『鬼神』に入ってから…後悔はしてないのか？」
「・・・それはどういう意味で、だ？」
「鬼を殺し、鬼を殺すものと共に過ごし、鬼が犯した過ちについて」
「・・・つまり全部という事だ」

ハサウェイの問に対して、ツクヨミは自分の手を見つめた。
「鬼を殺すという事について特に抵抗はないし、鬼を殺す…『鬼神』の奴らといてもどうも思わない…。鬼が犯した過ちは・・・」

そこで言葉を区切ると、勢い良く扉が開いた。
遅い動作で振り返ると、制服を着たリクがいた。

「見てみてーー！ここの制服、可愛い！」

ブラウスに赤い大きなリボン、赤と黒のチェックのスカート。
リクはくるっ、と一回転するとツクヨミに聞いた。

「どう??可愛い??」
「・・・さぁ」
「なに、その曖昧な返事はッ」
「お前の格好はツクヨミにとって、どうでもいいんだよっ」

今来たらしいフォルも制服を着ていて、ブラウスの上にグレーのジャケットを着て紺のズボンを穿きこなしていた。
フォルはツクヨミがまだ着替えてない事に気がつくと着替えるように促した。
軽くため息を吐くと、部屋から出ようとする。

「あー、待って！ツキにこれあげるー☆」
「??」
「さ、着替えてらっしゃーい」

リクに背中を押され部屋から出て行く。

「きゃーーーーー！！！ツキ可愛い☆」
「・・・何か違う気がするのですが…」

ツクヨミが着替えて戻ると、リクは紅茶を手に訳の分からない単語ばかり連呼し始めた。
ブラウスを着て、その上に茶色いカーディガンを羽織り、フォルと同じく紺のズボンを穿いている。

「いぃ！！ナイス萌えよ、ツキ」
「いや、ある意味この格好って普通じゃないの・・・？？」
「何言ってんのよッ！ツキだからこそ似合うんじゃないッ！これをフォルが着たらどう思うのよ！」
「いや・・・普通だと思う」
「だめよッ！萌えがないわ」
「だから、萌えって・・・」

いそいそと、ツクヨミの横にある髪をピンで留め始める。
左の部分だけバツのように二箇所に付けた。
それを見ると満足そうに頷き、フォルが持っている紙を取り上げた。

「見て！私とツキは同じクラスだよーーー！」
「・・・そうですね」
「フォルは一人、一学年上です。頭はアレですが、一応だそうですよ」

リクが見せてきたのはクラスの名簿らしく、学年は二年でクラス

は一組。フォルは三年四組だそうだ。

「もうすぐ学校の者が来る時間だろう。今日は二学期の始業式だから」

「いやー！楽しみだなァ」

「リクの場合はウザすぎて友達出来ないだろう。それに、背中にある刀が異様に目立つし…」

「フォルこそ頭がバカでそれに精神年齢が低すぎて友達出来ないだろうな」

「・・・うるさい」

――ツクヨミ（ツキ）の場合、友達どころか誰も近づかないだろうな…。

フォルとリクはそんなことを思いながらも、名簿を読んでいるツクヨミの次の言葉を待った。

「仕事の話をするぞ」

「「どうぞ」」

「・・・最初はヘタに手出しはするな。とりあえず、最初は学校に慣れろ」

「え～！情報収集とかしないの？？友達とかから、聞いたりとかァ～」

「・・・友達もいないだろ」

盲点☆、と可愛らしく舌を出してみせる。

コン、とフォルがリクの頭を軽く小突くとツクヨミはまた話し始めた。

「僕はまだしも、フォルやリクは学校に行った事はないだろ？」

「私は修行ばっかだったので、ありませーん」

「俺は登校拒否していたので、いってませーん」
「・・・あそ」
「っていうかツキはあったんだぁ～」
「・・・僕のことはいいです」

少し機嫌が悪くなったツクヨミは、名簿に目を通した。

「とりあえず、騒ぎを起こさない事…。リクは刀を持ち歩かないこと」
「えーーーー！これは私の相棒だよっ」
「分かってるけど、面倒臭いことになるし変な人に見られるよ」
「えーーーー」
「・・・友達出来ないぞ」
「うん、仕方ないね。置いていこう」
「友達のために、刀は置いていくのかっ！」
「フォルはばれない様なら、持って行ってもいいが・・・」

そう言うと、フォルは腰に巻いてあるベルトにばれないようにホルスターを付けていた。
そこから流れるような動作で引金（トリガー）に指を掛け、一回転させてホルスターから取り出した。

「どう？」
「それに対して、どう反応したら良いか分からないんだが・・・」
「…そう、か」

あからさまにガッカリとした様子を見せる。
それでも関係ナシにツクヨミはホルスターをじっと見つめた。

「ま、捲られなければ大丈夫か・・・」

「これはセーフだろ？」
「しかし、何かしてるときに捲れたらどうするんだよ・・・」
「大丈夫！俺ってば面倒臭がりやだから、多分何にもやんないと思うし」
「いーや、フォルならやるね！ゴキブリが出た瞬間に悲鳴上げながら拳銃取り出して絶対に撃ち殺す、って」
「いや、相手は闇の帝王だぜ？？」
「・・・たかがゴキブリで」
「なっ！！ツクヨミはゴキブリの恐ろしさを知らないんだッ」

ツクヨミに向かってどうでもいいゴキブリの知識を一生懸命に話しているフォルを無視して拳銃を奪い去る。

「M1911か・・・」
「そう、コルト・ガバメントだぜ！」
「コルト…？？ってことは、私よりも弱いやつか」
「何を言う！スチールコア弾とかなら日本刀なんて壊れちまうぜッ」
「・・・どうでも良いから」
「えぇー…ツクヨミは俺の味方じゃないのか？？」
「何いってるの？ツキは私の味方に決まってるじゃない」
「・・・じゃあ、一応許可は出しておくけど、ばれない様にね」
「え？無視」
「フォルならまだしも、私まで無視しなくてもいいじゃなーい！」

――・・・だって、どうでもいいし。
言ったらもっと面倒臭い事になるので、心の中でそう呟くと壁に背を預けた。
すぐ横にある窓から外を眺めながら、リクたちに言った。
「さて・・・そろそろ時間だ」

第十五話

「初めましてー！転入生のリク・アンダーリです！」
「・・・ツクヨミです」

始業式は体育館に集まらずに学園長室で過ごしてから、クラスに来た。
ツクヨミの言うとおり、リクの刀は学園長室に置いてきた。
元気良く挨拶したリクと、いかにもダルそうに挨拶をするツクヨミ。

「えー…じゃあアンダーリさんは前から三番目の…」
「あの、空いてる所で良いんですよね？」
「はい。そして…えーっとツクヨミさんは一番後ろの窓側のところで…」
「・・・分かりました」

二人は指定された席に座った。
ツクヨミは一番後ろの一番隅だった。隣に座るのは長い黒髪を垂らしているおっとりとした感じの女の子だった。
目が合うと、慌てたように会釈した。それにつられるようにツクヨミも会釈する。
――学校、か・・・。
女の子から視線を外し、外へと目を向ける。
外に見える木からは紅や緑が混じっていて、開いた窓から入ってくる風は生ぬるかった。
頬杖をつき、うとうとしながら外をながめてる。
眼鏡を掛けた担任の話を右から左へと受け流し、大きく欠伸をし

た。
しばらく、話が続くとチャイムが鳴ると担任も話を中断し、挨拶をして教室から去っていった。
それと同時にリクもツクヨミのほうへと駆けてくる。

「ツキ！！凄いよ！！学校凄いよっ」
「・・・うるさいよ」
「何言ってるのよー！これをテンションを上げずに何を上げるというのよっ」
「上げなくても良いから、世間体というものを気にしてください・・・」

周りの皆も転校生を覗きに来たり、リクの言葉に耳を傾けたりしていた。
リクはツクヨミの隣に座っている女の子と目が合うと、ニコリと笑った。

「ツキの隣の子だよね！！」
「え？あ、あのー…はい」
「私、リクって言うの！よろしく！」
「わ、私はユエ…ユエ・スティールと言います」

ユエの名乗った子は、長い黒髪を照れたように耳に掛けてぎこちなく微笑んだ。
リクはそのユエの手を握ると、目を輝かせていった。

「も…萌え…っ」

間を挟まずに、ツクヨミがリクの後頭部を叩く。
ふて腐れたように頬を膨らます。

「ツキったら、乱暴！」
「・・・乱暴と変態といったら、まだ乱暴のほうが良いと思うが」
「変態って誰だよ」
「・・・」

はぁ、とため息を吐き頭を抑える。
――どこで育て方を間違えたんだろう・・・。
実際的には育ててないが、来る前はこんな感じじゃなかった。もっと真面目そうだったのに。
ツクヨミは心の中で自問自答しながら更にもう一回、ため息を吐いた。

「なーに、ため息なんか吐いてるんだよ」
「・・・フォル」

三年の方に転入したフォルが堂々と二年の教室に入ってくる。
クラスの女子や、他クラスの女子はフォルを見ると頬を朱色に染めてキャーキャー言っていた。
フォルは茶髪の髪を掻き揚げるとツクヨミの机に座った。

「・・・あまりのリクの馬鹿さに呆れかえっているだけです」
「ひっどーい！私は馬鹿じゃないよ！フォルの方が馬鹿じゃないッ」
「あぁ、確かにリクは馬鹿だもんな。精神年齢が低いし」
「なっ！・・・フォルこそ見た目と年齢の割りに頭は小学生以下のくせにぃ」
「掛け算は覚えなくても、将来使わん！！」
「・・・足し算、引き算、掛け算、割り算は大人になってからも使うよ…」
「な、何だって！！」

本当にいらないと思っていたのか、ツクヨミの言葉に素直に驚いていた。
リクはそれをせせら笑うかのように、傍観していたユエに言った。
「この人ね、外見は良いくせに頭は小学生並なんだよー！」
「そ…そうなんですか…？？」
「この前、一日掛けて九九覚えてたんだよー」
「た、大変なんですね…」
「・・・リク、この人困ってるから」

ツクヨミは頭を抱えながら、リクに指摘する。
ユエは苦笑いするとツクヨミを見つめた。

「？」
「あ、いえ…なんでも、ないです」

頬を朱色に染め、恥ずかしそうに顔を逸らす。
ツクヨミは何が何なのか全く分からずに、不思議そうにユエを見ていた。

「そういえば、フォルは時間はいいの？・・・あと一分前だけど」
「げ！まぢ？」
「時計の針も読めないほど馬鹿だもんね」
「うるせー！…ま、クラス戻るわー」

そう言うと、そさくさと教室を出て行った。
授業なんてどうでもいー、とか言いそうな外見のわりに素直に教室から出て行く。以外に学校というものを気に入ったのだろう。
――フォルは馬鹿だけど考えは深いしやるとなればやる奴だし・・

・大丈夫か。問題は――・・・

「・・・早く席に着いたら??」

「おっとぉー!ここは学校だった…危ねぇ、忘れるところだった」

リクは多少異常に心配だ・・・、心の中でそう呟いた。

第十六話

気楽という学園生活は二週間がたった。
今ではリクやフォル達にもそれぞれ友達という友達ができ、学園生活に馴染んでいた。
ツクヨミにとっては学園生活などどうでも良く、早く事件を解決したかった。
しかし、その事件はツクヨミ達が転校した時からピタと何事もなかったかのように治まり、平和な学園生活が続いた。
一時期、もしかしたらヴィクトリカに騙されたと疑ったが、ハサウェイも何事も起こらない事に焦っていた。
同様にツクヨミも焦っていた。
学校で人との係わり合いが深くなるのはツクヨミはとても嫌っていた。というか、ツクヨミは人自身に近寄りたがらないし、学校の人間も愛想の悪いツクヨミには誰も近づかなかった。
ただ一人、ユエを覗いて。
ユエはリクとフォルとも仲が良くなり、ツクヨミ自身も隣の席ということで諦めかけていた。
ツクヨミはそれをユエが変わった人、リクとフォルのついでと思っているが、ユエに関してはツクヨミに対して特別な感情を抱いていた。
平和な学園生活には慣れてきて、リクやフォルは学校に飽きてきた頃だった。

「ツキ！部活に入ろう！！！」
「…はい？」

放課後、教室も昼間の騒ぎが嘘のように寮への帰宅、部活に行き

教室内も静かになった。その中にリクとツクヨミだけが残り、のちにフォルが入ってきた。

「おぉ、部活！俺も言おうと思ってたんだよな」

「…なんで？」

限りなく冷徹に返すツクヨミに額に汗を流すリクとフォル。

笑顔のまま固まった二人を据わった目で見続ける。

「ツキ、ちょっとまっててね」

「？……あぁ…」

リクはそのままフォルの襟首を掴み教室の隅へと引っ張っていく。

「おま…く、くび！め…ぐへッ…めり込んで…」

「五月蠅いわよ！…だいたい、あの後はフォルがいう役目でしょ！？」

フォルの襟首を更に、ぐっと引っ張る。

強く首を締められるとフォルはまた、ぐへっ！と苦しそうなうめき声をだした。

「まっ…首…死ぬ！！」

そういうとようやく、リクは掴んでた襟首を離した。

苦しそうに息を吸い込む。

「もー…フォルのせいでＯＫでずに、逆に禁止でたらどうするのよっ」

「いや、あの状況で…つかなんで俺なんだよ！お前が言えばいいじ

ゃねーかっ！」
「いやよ！だって、もしそれが駄目だったら私がツキ側につけないじゃないッ！」
「え！？裏切るつもりだったわけ！？」
「…気分よ」

そういって気まずそうにフォルから目線を外に向ける。

「え、なに…本気だったの？」
「とりあえず、おおとりはフォルに譲ってあげるんだから…成功させなさいよね」
「あ、今逸らしたよね？逸らしただろ…なぁ逸らしたたよ――」
「さて、いくわよ」
「今度はスルー！？」

フォルの言葉を途中で遮ると、自分の机に座っているツクヨミの元まで行く。
それに続いてフォルもリクの後を行く。

「んで、部活の事だけどね…？」
「いいよ」
「俺が何も言ってないのに断るなよ…ってむしろあっさりＯＫも出すなっ！」
「…じゃあどうしろと」

リクはＯＫがあっさり出たためか唖然としてた。
ツクヨミはため息を吐きながら、鞄の中に教科書を入れる。
鞄を抱えると教室から出ようとする。

「つ、ツキ？」

「部活…」
「はい？」

ツクヨミは首だけ振り返らせる。

「部活、見に行くんだろ？」
「！…うん！」

駆け足でツクヨミに駆け寄る。
ガラッ、と景気よく教室を開けると教室にフォルを残したまま、ツクヨミとリクは教室の外へ出た。

「これがいじめなのか…精神的にくるなっ…」

「見学？」
「うん！！！いいよねっ！ねっ！」

リクに連れられてきたのは畳の部屋だった。
竹で出来た刀、堅そうで重そうな防具を身に纏っていた。

「うーん…じゃあ一緒にやろうよ！！」
「いいのー！やるやるうううう！！！ねっ、ツクヨミ」
「……？あ、うん…いいんじゃない？」

それでも欠伸しながら隅に座り込む。

と、リクはツクヨミの手を引くと更衣室にまで引っ張っていった。

「えー…なに……」

「ツキもやるんだよーーー」

ツクヨミの小言も左へと受け流し、お構い無しにどんどんと引きずっていく。

「まー折角だしさー！異国の文化に触れようよー！」

「めんど……」

フォルがツクヨミ達の元に駆けつける間、二人はもう防具を身に纏っていた。

「あー阿呆のフォルだ」

「……阿呆だ」

「今オレの心はガラスよりももろいんだよっ！！」

「ガラスって…そこまで脆くないよね」

「……フォルのは分厚いんだろうな」

「酷い…いまので十分ズタボロだよっ！！」

悔しそうな顔をして、二人がつけている防具をまじまじと見る。

しばらく見つめてから首をひねる。

「なんじゃこりゃ？」

「ケンドーっていうスポーツのユニフォームよっ！！」

「ケンドー…ケンドー・コバ〇シかっ！！」

「……」

「ごめん」

リクはフォルを睨み付けると、竹刀を握り締めいつもやっているように構える。
しかしすぐに訂正させられる。リクは竹刀ではなく真剣で慣れてしまっているので、握りや振り方が違うので苦労しているようだった。
それに対しツクヨミは慣れた手つきで素振りを始めている。が、ツクヨミはあくまで淡々と素振りをしていて、叫び声はおろか掛け声すら聞こえない。静かに淡々と素振りをしていた。

「ほー…変わったスポーツだなー。この国特有のスポーツか??」
「……独り言??」
「ちげーーよ!淡々とそれ振り回してないで俺にもかまってよ!!」
「…はいはーい、ばぶちゃん…飴ちゃんあげるからだまっててねー…」
「ば…ぶちゃん!?って、ポケットから飴だすなよ!!持ってたのかよ!!」

そろそろうざくなってきたのか、竹刀を思い切りフォルの頭に叩きつけた。
フォルは変な奇声を上げると、隅っこに行ってうっ…と泣き始めた。
しかし、ツクヨミは気にしたそぶりも無く、むしろ逆にすっきりしたように見える。
隅っこで泣いていたフォルはしばらくすると気を取り直して、ツクヨミの元へと戻ってきた。

「この国もすごいなー…」
「……なんで?」
「だって、この国特有なんて国が大きくなきゃできないだろー…しかもこんなかっこいいスポーツ…贔屓目に見なくても結構評価され

るべきだろー」

顎に手を当てて（ありもしない）ひげをいじりながら、えらそうにそう言った。

「……何様だよ」

「むしろ俺様？？いやフォル様？？きっと神と崇められるんだろうな…やだなぁー…照れるなぁ」

「あー…馬鹿代表神様ってやつ？？」

「ちがうわあほっ！！」

「え…フォルにあほって言われるなら死んだほうがましなんだけど……」

すごく心外そうに言うが、ツクヨミは竹刀をフォルに向かって振り上げていた。

「まって！！目が本気！！痛いから……本当に痛いからあああああああああああっ」

「うるさい叫ぶな黙れハエって呼ぶぞ」

「…ごめんなさい」

いつもどおり誠意のこもりすぎた土下座をしてみせる。

そんな痛々しいフォルから視線を逸らしリクの様子を伺う。

リクはまだいろんな人にいろいろと教えてもらっていた。相当苦労しているようだった。

――――これのせいで変な癖がついて戦闘に支障が出なければいいけど…。

ツクヨミはリクから自分の握っている竹刀を見つめた。

「……いいことを教えてあげる。剣道はこの国特有のスポーツじ

ゃないよ」
「？？？そうなのか？？…じゃあどこの国の？」
「…ここからすごく遠い場所…多分言ってもわかんないよ」
「ふーん。じゃあ全然人気じゃない国なんだな――――ってなんでそんな冷たい目で見るんだよっ！！」
「……いや、ただフォルみたいな脳みそがない…じゃなくて頭が軽い人にはわからないって事」
「何だと！！…ハッ……盲点」

――あほだ。
心のそこからそう思った。
ツクヨミは握っていた竹刀を壁にかけて、フォルの隣へと座った。
うーむ、と真剣に考え込むフォルは形だけは様になっていても中身はなんにも様になっていないようだった。

「じゃあリクなら分かるのか？？」
「……いやわかんないんじゃないか？」
「ほーー・・・じゃああいつもあほなんだな！」
「……」

ため息もつくのが面倒になったツクヨミは代わりにフォルの頭を軽く小突いた。
いて、と軽く言うと、ふてくされた様に口を尖らせた。

「うぅー…じゃあどこの国？分からないんなら教えてよー」
「……言い方が開き直りに近いな…」
「もーいいの！あきらめるが勝ちだよ！」
「どこの言葉だよ……」
「んで、どこの国？？」

ツクヨミはしばらく黙る。
フォルも次の言葉を待つかのように黙り込んだ。
畳が敷き詰められている部屋に響くのは誰かの奇声と話し声、笑い声だけだった。

「――――――――――――」

その中にツクヨミの声が同化した。
いや、ツクヨミの声が小さいだけだったのかもしれない。
ツクヨミ自身も声がフォルに行き届いてないと気づいていた。が、すぐにその言葉を繰り返すのを躊躇っていた。
フォルも何も言わずに真剣に次の言葉を待っていた。
しばらくまた沈黙が続いてから、ツクヨミはようやく口を開いた。

「ここからすごく遠い小さい島国……鬼憑きに滅ぼされた――小さな国」

第十七話

「……鬼憑きに滅ぼされた…？そりゃまた、どうし――――」

フォルはツクヨミへの言葉を途中で区切ると、急に立ち上がった。
リクもなにかを感じ取ったかのように、持っていた竹刀を投げ捨てると廊下へと続く扉へと走り出した。

「ぬをぉっ！！行動早いんだよ…っ！！」

続けてフォルもリクの後を追いかけて走り出した。
畳の部屋に残されたツクヨミ以外の皆は顔を見合わせた。
はぁ・・・、と軽くため息をつくとツクヨミも立ち上がり特にあせった様子も無しに歩きながら部屋を出て行った。
しかし、ツクヨミは二人の後を追いかけずに二人が行ったのと違う方向に歩き出した。

「おいリク！敵はどこだっ！」
「馬鹿、そんなののもわからないのっ！？」
声を張り上げるようにフォルに言った。

フォルはリクの後を追いかけるように一歩下がったところから追いかけていた。

「どこだ??あれ、俺の聞きたいことはそれじゃなくて…えっとなんていうんだっけ…」

「言葉もまともにしゃべれないのかよっ!!っと…今は突っ込んでる場合じゃなかったわ…」

ガッ、と床を強く蹴り、角をすばやく右へ曲がる。

階段を何段も飛ばしながら、リクは自分の左の腰に手を当て、あることに気がついた。

「あああああああああああああっ!!」

「うおっ!!ど、どうしたんだよ…」

「刀!!刀は学園長室に置いたままだったあああああああああああああ!!」

「なにしてんだよっ!!!!」

武器がない鬼神はただの少し身体能力の優れている人間と同じである。

その状態で鬼憑きと戦うのなら不利になるどころか鬼憑きに殺してくれ、と言ってるのと同じことである。

リクはそれを自覚しながらも、走る足を遅くすることはなかった。

「おま…どうするんだよっ!!」

フォルの言葉にリクは答えようとはしなかった。

リクの足は正確に鬼憑きの元へと向かっていた。

階段を駆け上がり、長い廊下へと差し掛かる。

沈みかけた赤い夕日の光が廊下を差していた。廊下の奥から、足

音が一つ、二つ、三つ…リクには数えられる数、しかしフォルには数えるのを放棄しそうな数がこちらに近づいてくる。

「おい…武器がない状態で戦ったって死に戦と同じだろ…！」

フォルはリクの肩を後ろから掴むと、焦ったように言った。

しかし、リクはフォルの方をいつものように笑いながら振り返った。

「あんたの口から死に戦なんて言葉が出るなんてねぇ…世も末だね」

にひひ、と笑うとこちらに向かってくる鬼憑きの方を睨むと、強く床を蹴った。

「おい！」

リクの後を追うように、フォルも床を蹴る。

リクは聞く耳も持たずに、眼前に迫る鬼憑きに一歩近づいていく。

拳を高く掲げると、勢いよく鬼憑きに向かって振り下ろす。しかし、それは鬼憑きの横をかすり、姿勢を直す暇もなく鬼憑きの蹴りが勢いよく腹に入る。

蹴られた衝動で後ろへとはねる。

「ゲホッ……」

咳き込みながらも必死に立ち上がる。

そんなリクに鬼憑きは口を歪に歪ませたまま、刃物のように尖った爪をリクに突きたてようとして…

――ドンッ

乾いた大きな音。
リクは鬼憑きを見たまま音に振り返ることもなく、笑っていた。
音がしてしばらくすると、リクの目の前いた鬼憑きの顔が爆ぜた。
顔から左側が無くなった鬼憑きは動きを失った操り人形のように前のめりに倒れた。
また何度かの銃声が響くたびに、鬼憑きは体の一部が消え、倒れていく。

「なによ…今頃援護なんて…。遅いんじゃないの…！」
「へん！うれせーよ…リクに花もたせてやっただろ??」

どこがよ、と小さくつぶやくと体勢を持ち直す。
続々と倒れていく鬼憑きの群れに飛び込むと、そばにいたやつの髪の毛を強く引っ張り、壁にたたきつける。

「私だって…刀がなくたって戦えるわよ…逃がしなんかしないわよ」

リクは顔を引き締め、鬼憑きを蹂躙しはじめた。
フォルも右手に構えた銃口を自分に近づいてきた鬼憑きの額につけ

「元マフィアなめてんじゃねーぞ」

引き金を引いた。
撃った反動で上がった腕を肩に背負うように後ろに銃口を向けるとそのまま後ろにいた鬼憑きにも撃った。

「やべ…俺ってかっこいいんじゃね?」

いつもの調子で笑いながら鬼憑きへと発砲していく。正確に頭を

撃ち抜いていく。
鬼憑きの数はいまに両手でも数えられる数に減っていた。
「以外に弱いわね…全員意思持ちじゃなさそうよ…」
「だな…こんぐらいなら楽勝らくしょ――……！」
「！！」

――また…鬼憑きが出現した…！！
［マダ…兄弟ハイッパイ居ルンダヨ…］
「！？意思持ち」

意思持ちの鬼憑きは、口が裂けるほどに口元を歪ませる。
［アッハハハハハ…ウフフフフ…アッハハハハアハハハハ！！］
狂ったように笑い出すと、そばに居たリクを蹴り上げる。
気を抜いていたのか、されるがままに蹴り飛ばされる。

「っ！！」
［クダラナイ…コレガ鬼神カ…見テテツマラナイヨ］

ハァ、と落胆の色を見せると床を思い切り蹴りフォルに向かって爪で切りつける。
鬼憑きのスピードの速さについていけず、爪がフォルの右肩をえぐる。
痛みに唸ると、鬼憑きの足を撃つ。
弾は鬼憑きの足にめり込み、左足の自由を奪った。
［……］

「これで、自由には動けないぜ」

鬼憑きは一瞬真顔になったかと思うと、可笑しそうに笑った。

「何がおかしい！これでお前も終わりだ…」

［…ダッテ…コレデ私達ニ勝ッタツモリダナンテ笑ッチャウ…］

そういうと、指をパチッと鳴らした。

ガラッ、とたくさんの教室の扉がいっぺんに開いたかと思うと、教室からまた何人かの鬼憑きが出てきた。

鬼憑きはそれぞれ口々に言いたいことを言い合っていた。

「全員…意思持ち…！？」

「チッ…どうする？向こうにも鬼憑きが…」

「わかんないわよ！これだけの意思持ちを…しかも刀ないし…っ」

鬼憑きの中の一体が、敵意をむき出しにリクへと近づいていく。

一歩近づかれるたびに一歩後退をする。

鬼憑きはリクに向かって走り出そうとしたとき――

「なんでこんなに苦戦してるわけ…？？」

鬼憑きの顔に一本のナイフが突き刺さった。折りたたみ式のナイフが。

はっ、と後ろを振り返るを緑色の短いのか長いのかわからない長さの髪を持つ少年がたたずんでいた。その手には、鬼憑きに突き刺さったのと同じナイフが何本か握られていた。

「ツクヨミ！！！」

「ツキ！！！」

「…ここ以外にも鬼憑き居るんだから…急がないと…。ほら、リク」
リクに向かって、左手に握られていたものを投げる。
「か、刀！！とってきてくれたの！？」
「これないと、意味ないじゃん…」
明らかに喜びを隠し切れないように、刀の鞘を投げ出し、刀の刀身をじっと見つめるとそのまま刀を構えて、鬼憑きに飛びかかった。
とつぜんの逆襲に、反応できなかった一体がリクの刃によって右肩からへそあたりまできれいに二つに裂けた。
調子が戻ってきたリクはそのまま、横にはねると鬼憑きを横になぎ払い、首を刎ねる。
一体は胸を突かれ、一体は胴体が真っ二つにされ、一体は足がもげ…一気に数が減っていく。
ツクヨミは覚めた目でそれを見つめ、フォルは銃を構え一体に狙いを定め撃っていた。
［コレハコレハ…予想外ネ］
「…意思持ち、おまえもいつまでも傍観してもつまらないだろ？」
ツクヨミは、手にナイフを一本だけ残しほかの数本を袖の中に戻すと、ナイフの刃を鬼憑きに向けた。
鬼憑きは、そんなツクヨミを不快そうに睨むと、ツクヨミに向かって走り爪を心臓に向かって突きつけた。
はずだった。
しかし、目の前に鬼憑きのターゲットの姿は消えていて、鬼憑き自身の突き出した腕の肘から先が消えていた。
消えたのではなく、切断されていた。
何故、と考える時間もなくその鬼憑きの頭が、首からずれ落ちた。

「……よわ」

司令官をなくした体も首が落ちると同時に前のめりに倒れこんだ。いつの間にか後ろにいたツクヨミはそれだけつぶやくと、死体だらけになった鬼憑き達を眺めた。

リクとフォルも全員の処理が終わったらしく、疲れたように息を吐いた。

「さて…向こうに行きましょ…」

「……そうだな。向こうは一体…いや二体か??」

「どっちにしても、こっちに比べたら…比べるまでもないわね」

鞘を広い、血をふき取った刀身を鞘の中へとしまう。

フォルも怪我をした右肩をかばうように、銃をホルスターへと戻す。

「……フォルはここに残ってもらう」

「んえっ!?いや、俺だって…」

「その怪我じゃ邪魔になるだけだ。結構深くえぐられているだろ…」

ツクヨミは鬼憑きの死体から綺麗なブラウスを破るとフォルの肩にそれを巻きつけた。白いブラウスはみるみる赤に染まっていった。

「…しゃねー。じゃあここでエクソシストを待機してるよ」

「できるだけ、安静にしときなさないねー」

「おうよー」

軽く言葉を交わすと、リクはすぐに次の標的の鬼憑きの方へと走っていった。

「気をつけろよ・・・あいつは軽く思ってるけど、多分ここに居るやつよりも何十倍も強いぞ」
「…それなら僕じゃなくてさっきリクに言えばよかったものの…」
「まあまあ…まツクヨミなら安心だけどなー」

壁に寄りかかり、ずれ落ちるように座り込むフォル。その顔は少し不安に曇っていた。
そんな様子を見てツクヨミはあきれたように、しゃがんでフォルに視線を合わせた。

「そんなに好きなら告白すればいいんじゃない？」
「んなっ！！！！ば、っか！！！な、なにいってんだよ！！そんな、わ、わけないだろっ！！」

みるみるうちに、顔が朱色になっていく。
怒りなのか、照れなのかはもうツクヨミは理解できていた。
すこし、嘲笑したような笑みを浮かべると立ち上がってリクの走ったほうへ歩いていった。

「ま、そういうことにしといてあげるよ」

歩きながら後ろにいるフォルに背中越しに手を振る。
ツクヨミが視界から消えると、朱色に染まった顔のフォルは自分の顔を手のひらで覆った。

「なんでバレたんだよ……」

第十八話

「んあー…もうなんでこんなに学校は広いのかなぁ…っ！！」

一人で愚痴をこぼしながら、足を速める。

右に行ったり、左に行ったり、忙しなく廊下を進む。

「リク…！」

「ツキ、どうしたの？」

後ろから、ツクヨミも追いつきリクの横に並んだ。

「向こうにいる、鬼憑き…さっきのよりも強いぞ…」

「…なんとなくそんな気はしてたんだけどね…。そういう感知は私よりもツキやフォルのほうが強いでしょ？」

「まぁな…たぶん僕でも苦戦すると思う」

そんなにか…、口には出さずに心の中でそう呟き、刀を持つ手がいっそう強まる。

夕日が落ちかけた外に目をやる。

楽しそうに談笑しながら友達と下校を始めている。

それを眺めるとすぐ廊下をまっすぐと見据え、角を曲がる。

「それなら…頑張んなくちゃね」

「……」

ツクヨミはリクの事を認めていた。

リクは身軽だし、攻撃もすばやい。刀の長さを生かして敵に強い

一閃を与えることもできる。
しかし、リクはあがりやすく、血が上るとすぐに身投げをしてでも戦いに行く。
ツクヨミはそこが心配だった。
意思持ちになると、相手にただ向かうのではなく弱点を突いてきたり、攻撃も早くなる。
そして理解力もついてくるのだから、挑発のひとつでもされればリクは簡単に罠にはまってしまう。

「…そうならなきゃいいけど」
「??何が??」
「いや…なんでも――」

ツクヨミはそこで言葉を区切ると、急に方向転換をして左へと曲がったリクと逆の右へと曲がった。

「!?ツキ、鬼憑きはこっちだよっ!?」
「後から行く…僕はこっちに用ができた…!僕が行くまで死ぬなよ」

リクからツクヨミは背中しか見えなかったがいつもと同じ口調で、リクにとっては信頼できる言葉だった。
それからなにも聞かず、言わず、リクはそのまま左へと走っていった。
ツクヨミも右に曲がると、すぐに左に曲がり、まっすぐ走り出す。
――今の気配…は…。
しばらく走り、科学室というプレートのかかった部屋に入っていった。
そのまま、歩調をゆっくりにして科学室の隅に歩いていく。

「…やっぱり…いた」

そこには、何人かの学校の生徒たちが互いに肩を貸す様に眠っていた。
一人の男子生徒に近づき、首に手を当てて脈があることを確認する。
一歩、その生徒から離れると冷たい目で生徒たちを見下ろし、左の袖からナイフを出す。
そのまま振り上げて奥に眠っていた、一人の女子生徒に振り下ろそうとして

[まだ、私達のことに気がついてもないのに殺すなんて…鬼神はなんて無慈悲なんだろうね]

後ろの声にその手を止め、逆の手からナイフを出して、振り返らずに後ろにナイフを投げた。
後ろにいた鬼憑きはその攻撃を早い動きではじき返した。

[意外に早いね…君]
「お褒めに預かり光栄ですよ…」

その鬼憑きはクスリと笑うと、戦う意思も無さそうに壁に寄りかかった。

[私達はここであなたの足止めをしなければいけないんだ…だから向こうには君は必ず行けないよ?]

そこで区切ると、いろんなところからたくさんの鬼憑きが現れた。
それぞれの手には武器という武器が握られていた。
ツクヨミは、両手から何本かナイフを指の間に挟んだまま、壁に寄りかかったままの鬼憑きを睨んだ。

「悪いが…向こうには仲間が待ってるんでね」
［そう…私も上からの命令だからね。これは欠かすことはできないんだよ…］

そういうと、普通の人間と同じように普通に笑った。
――相当の力の持ち主だな…こいつは。
手に持ったナイフを鬼憑き達に投げる。
鬼憑き達は何の障害もなく、ナイフが顔に突き刺さり倒れていく。
何匹かにナイフを投げると、手元にナイフがなくなることに気がつくと、科学室の机の引き出しを勢いよくあけ銀色のスプーンを取り出す。
そのまま、スプーンを鬼憑きの目玉に突き刺す。
口から紅い血を吐き出しながら、両目にスプーンを突き刺したまま倒れる。
ツクヨミはそのまま倒れた鬼憑きから、スプーンを一本抜くと迫りきた鬼憑きの喉にスプーンの柄を突き刺す。
ツクヨミの無双の様子を傍観していた、鬼憑きはヒュウと口笛を吹くとツクヨミに向かってせせら笑った。

［やるじゃん…もう半分になっちゃったよ］
「お前はいつまでもそうやって傍観してるつもりか？」
［できればそうしていたいねぇー］

余裕という様子で、壁に寄りかかったまま動きもしない鬼憑きを横目に拾ったナイフでほかの鬼憑き達を駆除していく。
ナイフを鬼憑きの首に滑らそうとしたが、その前に鬼憑きが握っていたナイフによって相殺された。
そのまま、後ろに回っていた鬼憑きがガラスのコップでツクヨミの頭を強打した。

くっ、と唸りながら姿勢を直し、ナイフを後ろの鬼憑きの喉に刺す。
鬼憑きは倒れると、その後ろからもう一体すばやくツクヨミに近づくと右腕を掴んだ。
同じように、前にいた鬼憑きもツクヨミの左腕を掴み、身動きのできないように押さえ込んだ。
[どう？他のみんなは意思持ちなんだ。簡単にはいかせないよ？？]
ふふふ、と笑うと愉快そうにツクヨミのほうへと歩み寄る。
顔を歪ませながら、その鬼憑きを睨みつける。手に合ったナイフもすべて他の鬼憑きの顔に突き刺さったまま尽きてしまった。
[これで…向こうにはいけない。あの娘も死んで私達はハッピーエンド]
「…まだ、間に合うだろ」
攻撃的な発言に鬼憑きはツクヨミを睨むと、床に落ちていたナイフを一本拾った。
[間に合う？戯言を…寝言なら今すぐそれを寝言にしてあげようか？]
「…寝言にしては目が開きすぎたとは思わないのか？？」
鬼憑きに嘲笑してみせた。
しかし、鬼憑きはツクヨミの挑発には乗らずにナイフをいじり遊びだした。
[ま、実際私はこれどうでもいいんだよ。上からの命令じゃなかったら絶対に動かないよ…本当に]

「…？？」

［だけどね、私がこんなに不満に思うのはさ…ここに生きている同族（鬼憑き）を全員合わせれば上の奴等には勝てるんだよねー…なのにランクは私達の方が下…なんか嫌なんだよな］

はぁ、とツクヨミに向かって愚痴をこぼし始める。

机に腰掛けながら、ツクヨミに視線を落としながら口を尖らせる。

［結局は向こうにいるやつよりもこっちの私達のほうが強いわけなんだ。だから、向こうにも苦戦しそうならこっちの奴等には絶対勝てないってこと。あきらめて、私にその体よこしなさい］

口を三日月のように歪ませて、ツクヨミの顎を上げた。

［ね、君強いし…その体僕が美味しくご賞味しようか？？］

無邪気な笑顔を振りまいたまま、ツクヨミに顔を近づける。

ツクヨミはいつの間にか鬼憑きを睨むのをやめ、笑みを浮かべていた。

［！？なに、あきらめたの？？］

「……逆」

それだけ言うと、ツクヨミは抑えられている手を勢いよく振り解くと、床に落ちていた一本のナイフを拾った。

［…私達に勝とうとでも？？］

「その通りだけど？？」

さも当然かの用に答え、右手に握ったナイフを鬼憑きに向けた。

「さて…これから僕の虐殺が始まるわけだけど……一つだけ言わしてね？」

左手首を上に見せるような形で前に出し、そのままナイフを手首に当てて

「僕も制御できるか分かんないから、気をつけてね」

切った。

ナイフを滑らした手首はどんどん紅く染まっていく。

鬼憑きはそれをいぶかしみながら、動きが静止したままのツクヨミを見ていた。

［…あまりのピンチに螺子が飛んだのか？］

そのまま、鬼憑きは他の鬼憑きに殺すように促すと、一人が床を強くけり、間を一気に縮め爪で切り裂こうとした。

しかし、ツクヨミがその手首を掴みそのままその腕を――もぎ取った。

［！？］

もぎ取った腕を床に投げ捨てると、右手で鬼憑きの頭を掴むと、骨が軋む音を響かせながら首を腕力だけで百八十度回転させた。

動きを失った鬼憑きを手から離し、倒れた鬼憑きをジッと真紅の瞳で見つめる。

しばらく、鬼憑きを眺めてから口を歪ませた。

『ふふふ…ふふふふふふふふふ』

［!?なぜだ…これは］

鬼憑きは目を見張ると、蒼い色から真紅の色に変わった瞳に違和感を感じながら一歩退いた。

『なぜ…鬼憑きの気配が感じるのか…かしら??』

［……私達と同じ同族か??］

『貴方達と同じ芸のない人間にしないで頂戴…でも、人間じゃないわね』

クスクスと笑いながら、ぜんぜん雰囲気の違うツクヨミに戸惑っていた。

急に笑いが止まり、むっとした顔になる。

『分かってるわよ…急いでることぐらい…だけど少しだけ遊びたいじゃない?』

大きな手振り身振りしながら、ぼやき始める。

ツクヨミとは違い、表情の変化が激しかった。だけど大体は妖艶な笑みを浮かべていた。

『ええ…早めに終われせればいいんでしょ??久々に呼び出したかと思えば、我(わたし)はゆっくり出来ないのね……。だけど、たまには外の世界を堪能させてほしいものだわ。何故って…内(なか)はとっても窮屈だもの!外の世界にいきたいわ!!そして甘い甘い血で喉を潤すの!…素敵でしょう?』

そういうと、つまらなさそうに髪の毛をいじり始めた。目の前の鬼憑きはもう眼中に入ってないようだった。

諦めたように、ため息をつくと切れた左手首を眺めた。

『分かったわよ…だけど今度は外の世界に出さしてほしいわ…え？？人？殺すに決まってるわよ。だってそれが我の存在理由でもあるんだか――わかったわよ…約束は守って頂戴ね？』

そういうと妖艶な笑みを浮かべ、ナイフを握り締め走り出した。

鬼憑きは反射的にナイフをはじき返した。が、ツクヨミはそのままナイフを横にいた奴の顔面にたたき付け、逆の手で鬼憑きの顔を強く掴み、粉砕した。

顔面に刺したナイフを素早く抜き、振り向くのと同時に、後ろからツクヨミの心臓に一突きしようとしていた鬼憑きの心臓に投げつけた。

振り返る遠心力を利用しながら鬼憑きの顔に強く蹴りをいれ、顔の赤い物を撒き散らしながらトマトのように壁にぶつかった。

すべての鬼憑きを一閃するのにそんなに時間はかからなかった。

いや、すべてではなかった。

『あら…まだ生きてたの？？しぶとい女は男に嫌われるわよ？？』

［ふざけるなっ！！！！！］

鬼憑きは叫び声をあげると、ツクヨミを指差しながら恐ろしそうにいった。

［この…同族殺しがあっぁ！！！鬼神のくせに鬼憑きのくせに…成れの果て――ガッ！！！！！！！］

血を吐きながら顔の右半分を失い倒れていった。

不愉快そうに、倒れた鬼憑きの顔を判別が出来ないほどにグチャグチャに踏んだ。

『うるさいわねぇ…この人を馬鹿にしていいのはこの人が許した人だけなんだから…慎みなさい』

そういいながら、止まることなく踏み続ける。

急に踏む足が止まった。

『…分かったわ。そろそろ我は戻るとしましょうか…よろこんで貴方様の器の中へと――ご主人様』

体がぐらっ、とゆれれたかと思うと真紅の瞳から蒼い瞳に戻っていた。

息は少し荒く、苦しそうに息を吐き出していた。

「……やりすぎ…なんだよ、馬鹿が…」

ツクヨミは少しだけ、微笑むと胸に手を当てていった。

「お疲れ…ヴィンセント」

第十九話

フォルは鬼憑きの亡骸に囲まれながら、ため息を吐いた。
ツクヨミに言われた言葉に何十分悩んだだろうか…いやもしかしたら数分なのかもしれないが。
頭を抱えて、もう一度深いため息を吐く。

「あー！だめだめ！無駄に脳みその線を増やしたくねー…」

自分の両頬を勢い良く叩く。
しかし、強く叩きすぎたせいで頬に痛みが走る。
そのまま呻きながら痛む頬を覆ってうずくまる。
その時、目の前の空間が歪んだ。
歪んだ場所は黒いブラックホールの様な渦を巻きだす。
フォルを楽々飲み込めそうなぐらい大きな渦が巻くと、その渦が固まり大きな鉄の扉になる。

「…やっとお出ましかー」

痛む頬を撫でながら、扉を見つめた。
その扉は重く軋む音を響かせながら小さく開く。ようやく人一人が通れそうなぐらい開くと、そこから白く細い手が出てくる。
手に続くように、足、身体、顔と順々に出てくる。
顔は黒いフードで覆われていて、身体も黒で埋め尽くされていた。
エクソシスト。
鬼神とは違う力を生まれながらにして持っている、神の代理人。
鬼神は、化け物。エクソシストは、天使。鬼憑きは悪魔。

第三者から見る偏見。
鬼神は鬼憑きを駆除し、エクソシストは後始末。
フォルはあまりエクソシストが得意ではなかった。
エクソシストは鬼神を汚いような目で見るからだ。鬼神は手を汚す。関わった関係ないものまでも殺める。
だからエクソシストは自分達をそんな目で見るのかもしれない。
扉から出てきたエクソシストは、辺りを見渡すと、フォルを見つける。
しばしの沈黙。
エクソシストの憂鬱感。
フォルの遺憾。
色んなものがその沈黙の中に漂う。

「ツクヨミさんじゃないッスか…」

エクソシストが小声でぼやく。

「??いま、なんて?」
「…別に」

澄んだ綺麗な中世的な声だった。
ツクヨミは普通よりも少し高い声で、綺麗だと思うが、ツクヨミの場合は常に不機嫌そうな声色が混ざっている。
このエクソシストは中世的で、低くも高くも無い綺麗な声だった。が、不機嫌ではなく、期待が裏切られた時のような…少し沈んだ声色だった。
エクソシストは、周りに倒れ折り重なっている鬼憑きを見つめると、そこに右手をかざした。

「――――――――――――」

何かを呟くと、鬼憑きは淡く青白い光を放つと、まるで紙くずのようにバラバラになり、消えていった。
フォルはつい、感嘆をもらした。
――これは何度見ても興味深いな…《鬼憑き》というのは化け物ではあるが人でもある。
それが紙のようにバラバラになり、無かったかのように紙も融解されてるんだ。
鬼憑き事態が浄化されている……のだろうか？
フォルはエクソシストをボーっと眺めながらそんな事を考えた。
まぁ…、大きな欠伸をした。
――憶測でモノを語っても、所詮憶測に過ぎないから考えても意味ないんだがなー…。
エクソシストは神の代理人。
つまりは、存在する事を望まれる天使。
――神の力を使ってるんだったら、とんでもないチートだよなぁ。
俺等は祝福なんかも受けれないのに、と特に皮肉でもなんでもないただの愚痴を心の中でぼやく。

「……向こうにも、鬼憑きの亡骸が…」

エクソシストは、さっきリクとツクヨミが走っていった方を見つめながら、そう呟いた。
少しだけ、フードの中から顔が見えた。
しかし日が暮れてきているために、顔もはっきり見えなかったが、夕焼けに照らされ碧色の瞳が見えた。

「あのさ、聞きてーんだけど」

エクソシストは辺りを見渡してから自分の顔を指差す。

「……自分スか？」

フォルは否定も肯定もせずに話を続ける。

「この学園の屋上に居る鬼憑き…どのぐらいの力だと思う？」

真剣にエクソシストに尋ねる。

エクソシストは、しばらく無言で黙っていた口を開いた。

「さぁ…？自分ははっきり言ってどうでもいい」

それはエクソシストの本心なのだろう。

やれやれ、といった様子でエクソシストは肩を落とした。

フォルは、つまらないようなものを見る目でエクソシストを見つめた。

そして自分に自己嫌悪しているみたいに、エクソシストから顔をそむけ窓から外を眺める。

陽は完全に傾き、紅に染まっていた。

エクソシストは、そんなフォルの態度に見向きもしないように再度口を開いた。

「……だけど――――」

――あの人がいれば…

強いも弱いも、可能も不可能も関係なしに全部蹂躙しちゃうんスよね…。

リクは長い階段を駆け上がっていた。
屋上から感じる強い気配が自分に重く圧し掛かるのを感じながらも、足は緩めず、逆に歩みを早くした。

腰に携えている刀が妙に軽く思えた。
――この階段を駆け上がれば…っ！
勢い良く最後の段を蹴り上げ、屋上へと続くドアを刀で壊す。
白いタイルが敷きつけられた屋上。
タイルは生徒達が長く使ってきたためか、黒ずんでいる。
そして、緑色のフェンスの近くにあるベンチ…そこに鬼憑きは悠々と据わっていた。
グレーのスーツで身を包み、足と手を組みながら不敵に笑みを浮かべる。

［やあ、いらっしゃい…待ってたよ］
「お前がボスか…！？」

何も答えずに立ち上がり、リクに手のひらを向ける。

「！！」

一瞬遅れて右へ飛んだ。
突如、鬼憑きの手から突風が生まれる。
風、というよりも小さくなった竜巻のようだった。
しかし、小さくとも威力は竜巻と同等。さっきまでリクがいた場所は粉々に、吹き飛んでいた。
フェンスを突き破り、周りに囲っていた結界が破れる音がした。
リクは目を見開いた。
――これほどの力だなんて…。
結界が破れるほどの力。意思持ちの場合に鬼神等が無意識に自分が発動させる結界が壊れるなんて、滅多にあるものじゃない。
結界を破れる者…鬼神、エクソシスト…他には力が強い者。
鬼憑きは、それほどまでに強いのだ。
いや、自分が無意識に作った結界が弱かったのかもしれない。

だけどいくら弱くても、その結果が破れるなんて…。
力量差。
厚い壁。
リクは感じた。
――私は、強くなったんだ…前なんかに比べ物にならないほど…。
だから……っ、リクは抜刀し柄を強く握る。
壊れた結界を、今度は意識を集中し強い結界を張る。
ふぅ、と落ち着くために深呼吸をし、鋭い眼光で相手を見据えた。
鬼憑きは絶対強い。油断は禁物、少しでも気を抜いたらそこで負けが決まる。
先手をきらなければ…。
そう思っても、近づいただけで相手に一閃されるだけだ。
間合いを感じる。
主に間合いを生じて、抜刀したり、間合いを武器にすることの多い侍では相手の巨大な間合いを感じ、冷や汗を流した。
動けない。
動けばすぐに相手の間合いに入り込んでしまう。
しかし、そこで棒立ちのように相手を見てるだけでは何も出来ない…。
再度息を吸い、相手の間合いへと一歩踏み込んだ。

「はぁぁぁ

しかし、フラフラになりながらもリクは立ち上がりぶつかった時に手から落ちた日本刀を拾い上げる。

［どうした？もうフラフラじゃないか…息も上がって…］

鬼憑きはその様子を楽しむように、リクを眺める。

鬼憑きはリクが来た時にベンチから立ち上がった以来一歩も動いていない。

――ゲームでいうならチートね…。

仕方が無い…、口の中でそう呟くとリクは目をつぶった。

息を止め、周りの情報を掴む。

風の向き、雲の流れ、時のながれ、心の凪がれ、血の流れ…。

落ち着け…。自分に何度も言い聞かせる。

自分の欠点はなんだ？自分に問いをかける。

真っ向勝負、真正面からの突撃、すぐに熱くなる事…。自分の問いに回答を述べる。

私じゃあの鬼憑きには勝てないの？自分に対する反語。

――そう、そんなことはないっ！！

閉じていた眼を開き、柄を掴む手を少し緩める。

少し冷めた眼で鬼憑きを見つめるリクは、さっきとは雰囲気が違い、相手を探るように眼を色んな方に向ける。

［……ふふふ、これは面白い］

「黙れ…次は、上手いく」

――――ダンッ！！！！

何かが爆ぜる様な大きな音がした。

しかし、それはリクが床を思い切り蹴った音だった。

油断をしていたのか、リクは一気に鬼憑きの懐に潜り込んだ。

鬼憑きは身をねじらせ、リクの一閃を避ける。

リクはそのまま勢いを殺さずに、鬼憑きが避けた方向に回し蹴りを入れる。
それをまともに受けた鬼憑きは一メートルほど後ろに吹き飛ぶと、フェンスを蹴りリクに近づく。
覚醒した手でリクの喉を突き刺そうとする。
リクは自分の刀の刀身で、その攻撃を相殺する。

「油断してるから…っ……そう、なるのよ…」
[意外にやるね…君の力に高をくくっていたよ]
「そ、う……なら……――っ」

ギィン、とよりいっそう強い音を響かせて手をはじき返す。

「間違いに気付けてよかったわね！」

もう一回床を蹴り鬼憑きに接近する。
鬼憑きは今度は速く反応し、リクの攻撃をかわすと腹めがけて蹴りを放つ。
体を翻し蹴りを避け、今度は鬼憑きの顔に回し蹴りを入れる。
反応し切れなかった鬼憑きは、攻撃をくらい後ろによろける。
よろけた鬼憑きの距離を一気に縮めて、刀を振りかぶる。

「――鬼憑き…覚悟！！」

一気に振り下ろした。
しかし、その攻撃は鬼憑きには当たらずに空を切った。
リクは次に鬼憑きがやりそうな攻撃に備えて、後ろに一歩下がった。
が、攻撃はこなず、それどころかさっきまで鬼憑きがいた場所から鬼憑きは消えていた

「いない！？…どこにいった？」

辺りを見渡すが、姿はおろか気配すら感じられない。

――逃げられた！？

そんなはずは、と思いながらもリクは不安がだんだんと広がっていく。

ここは結界の中だから逃げられるはずが無い。しかし、現に気配も感じられない。

何故だ…。鬼憑きにこの結界が破れるはずが無い。鬼神の結界が破られるはずが無いのだ。

しかし、さっき鬼憑きは一番最初の攻撃で自分作った結界を壊したのだ。

もし、逃げられたのなら大変な事になるだろう。

もっと人を食べ、力をつけたらいくらフォルやツクヨミでも敵うのか分からない。

「クソッ……どうすれば――っ」

［少し気配を消しただけで、ここまで無防備になるなんてな……］

「！？」

しまった、と急いで刀を声の聞こえた後方へとなぎ払おうとするが、遅かった。

気配を殺していた鬼憑きは、リクの背後にまわっていた。

妖しい笑みを口元に浮かべると、リクの襟首を強く掴み床に叩きつける。

「くっ……！」

呻きをあげ、かろうじて握っている刀を上に圧し掛かろうとする

鬼憑きの足を切りつける。
しかし、刀身は鬼憑きに踏まれ身動きも出来ない。
鬼憑きは左手でリクの首を絞め、覚醒し始める右手を振りかぶる。
リクは動く事も出来ず、刀を振るう事も出来なかった。
――死ぬ…っ！

［そう怖がらなくていい…いや怖がってくれないとこっちが困るのだがねぇ…］

ククク、と口元を妖しく歪ませる。

［じゃあね♪］

振り上げた右手を勢い良くリクの喉めがけて振り下ろした。
そこからは時間がゆっくりに感じた。
生きたい、という意志がなくなったのかもしれない。
つまり諦めたんだろう。
せめて…両親や皆の敵だけでもとりたかった…。
リクは目をつぶった。
風を感じる。自分の顔を横切る素早い風を感じた。
そして、自分の顔に温かい液体がかかる。
――…私の全てが終わったのかな？痛くないもん…。
きっと、この鬼憑きに喉を掻っ切られたんだ。
そう思い、閉じていた瞼をゆっくりと開いた。
一番最初に目に入ったのは、だんだんと色が薄くなってきた緑色の髪の毛と見覚えのある顔――

「……ツキ？」
「何死のうとしてるわけ？……僕が来るまで死ぬなって言ったはずだけど…？」

――なんだ…死んでないじゃん。
リクの口元から自嘲の笑みが自然と洩れる。
安心したリクは、そのまま気を力をなくしたようにぐったりとした。
ツクヨミは心身ともにボロボロになったリクの脈を確認し、生きている事が分かるとリクを担ぎ原型を無事に留めている壁に寄りかからせる。

［……何者だ］
「……」

ツクヨミは、両腕が綺麗に切断されている鬼憑きの方に向き直る。
鬼憑きは、突如両腕を切断された血だらけのナイフを右手に握るツクヨミを忌まわしげに睨む。

「……まあ聞かなくても分かるよ…ここまでリクをやったのは君だね？」
［ふん…聞かなくても分かるのだろう？］

…まあね、とナイフを袖から何本も出し、指の間に挟み、鬼憑きに向かい嘲笑を浮かべる。

「リクが君を倒さなくて良かったよ…」
［……なんだと？］
「さっき、いろいろあってさ……君たちの場合はどうかわかんないけど、僕の場合はチート使うと後遺症が残るんだよねー…」
［何の話だ］

鬼憑きは呆れ顔で、されど警戒しながらツクヨミに構える。

「何の話？だから君が今から我（わたし）じゃなくてこの僕に殺戮される理由だよ？…なにもわからないまま消えていくのはイヤでしょ」

ツクヨミは鬼憑きに特に警戒した様子もなしに、鬼憑きに一歩、また一歩と近づいていく。

「んで後遺症なんだけど……」

床を思い切り蹴り、鬼憑きの首元にそのままナイフを突き刺す。鬼憑きは間一髪でそれを避ける。が、反応が遅く右目から上を深く切られる。

「自分自身に閉じ込めてる殺戮したいと思う本能が勝手に出てきちゃうんだ…だから……今とっても誰かを殺したいんだ……。だから少しは粘ってよね。僕が満足できるまでさぁ」

――よかった、相手が強い人で…。この戦いが今の一発で終わってたらきっとリクまで殺してたなぁ……。

第二十話

「……ここにもいないか…」

エクソシストは科学室に来ていた。
大量のひどい有様の鬼憑きを、冷たい目で一瞥してからさっきと同じように浄化させる。
ため息を一つ吐くと、強く残っている鬼憑きの気配を感じ取った。

「この気配は……」

あの人の気配だ、エクソシストは強く感じる天井を見上げた。
そこから遙か上には屋上があった。

右、左、右、左、左、左、正面、右…。
次も右に、風を切る音が鬼憑きには聞こえていた。

目でギリギリ追える速さのナイフを避ける事で精一杯だった。

「なに？随分大人しい鬼憑きなんだね？」

ツクヨミは鬼憑きに向かって、たった一本のナイフで鬼憑きの動きを制限していた。

鬼憑きは避ける事しか出来ず、しかし後ろに下がれば形勢は逆転し、流れを相手に渡す事になる。

ツクヨミの攻撃は速く、避けるので精一杯だ。

鬼憑きは、左に切りかかってきたナイフを屈んで避けると、ツクヨミの腹に肘を入れる。

しかし、腹にきた鈍い痛みに顔を歪ませる事もなく、逆の手からナイフを二本取り出すと鬼憑きの両足に刺した。

［グッ……！］

鬼憑きは、そのまま腹に肘を入れたその切断されている手首でツクヨミの腰にてをかざした。

口元を妖しく歪ませ、鬼憑きはツクヨミに向かって炎を生み、爆発した。

その炎はツクヨミのわき腹を抉り、そこから血が滴る。

しかし、ツクヨミはそれに気にした様子もなく、鬼憑きの腕をさらに切断する。

鬼憑きは痛みに悲鳴にならない悲鳴を上げると、さらに後退した。

しかしツクヨミはそれすらも許さないように、鬼憑きとの距離を一気に詰め、ナイフを首元に突き刺す。

そのまま、さっきのような妖しい笑みが消えた、無機質な無表情のまま、ナイフでのどを横に切り裂いた。

首から血飛沫のようなものが上がると体から力が抜けたように、その場に倒れ込んだ。

「何だ…手応えのない……」

ツクヨミはそう呟くと、血のついたナイフを一瞥してから、倒れている鬼憑きの頭に突き立てた。

と、同時にかろうじて形を成している屋上の扉が軋む音を響かせながら開いた。

「やっと…ご到着？」

扉から入ってきた、フードを深く被った人物…エクソシストに言葉を投げかける。

エクソシストはツクヨミを見た後、フェンスに寄りかかっているリクを視界に入れる。

「やっと…といっても、丁度でしょう？…それに思っていたよりも、鬼憑きの数が多かったんですよ」

「……」

ツクヨミはエクソシストを、変なものを見るような目で見つめた。

「仕事中の君は、礼儀正しすぎて…気持ち悪いよ？」

「ははっ…まあ仕事には誇りを持ってるッスから…」

そう言うと、鬼憑きの元へと歩み寄り、手をかざし何かを呟く。

次第に、鬼憑きは淡く光だし、紙くずの様にばらばらと不意に流れる風に飛ばされる。しかし浄化されるべきではないナイフはその場に音を立てて床に落ちる。

「…優秀だな」

「何に対しての優秀か分からないけど、一応もらっておきます」

エクソシストは一息つくようにフードを外して、素顔を遮蔽物なく表へさらけ出した。

ツクヨミよりも年上だろうか、顔立ちは幼く、茶色い髪の毛に翡翠色の瞳で表情は柔らかく、微笑んだままツクヨミを見つめていた。

「久しぶりッスね」

「…そうだな」

エクソシストは黒い服を脱ぐと、中に着込んでいたらしい清潔そうな白い服になった。

襟はセーラー服のようなイメージをさせるようなロング丈の服で、オレンジ色のラインが走っていて、その服と服の端をつなぎとめるように、赤いリボン紐のようなものが靴紐のように結わえられていた。

「やっぱり、黒は自分には似合わないッスね」

「エクソシストは白、鬼神は黒…って？」

嫌味のように言うと、エクソシストは苦笑いを浮かべた。

「違うッスよ…自分はね」

「お前だけは…な」

シスカと呼ばれたエクソシストは、少しだけ哀しそうに微笑んだ。

「自分を卑下したらいけないッスよ？」

「今の会話のどこで、僕が自分を卑下している様に聞こえた？」

「聞こえたんじゃなくて、感じ取った…って言えば信じてもらえる

ッスか？」

ツクヨミは何も答えずに、空を仰いだ。
シスカも同じように空を仰ぐが、すぐに思い出したようにツクヨミに向き直った。

「そういえば上から、鬼神に伝えるように頼まれたんスけど…」
「なにを」
「この学園内で急激に鬼憑きの数が増殖中で、そこで調査した結果…学園内で『アロユール』の気配が確認できた…と」
「『アロユール』…だと？」

いぶかしげに目を細め、シスカに聞き返す。

「はい。早急に回収するように…と」
「…まさかな…。なんとなく気配は感じてはいたんだが」

ため息を吐くと、頭を抑えた。

「鬼神よりもエクソシストが回収したほうがいいんじゃないか？」
「自分もそうと思うんスけど…エクソシストの間でも問題が発生して」
「問題？派閥でも酷くなったのか？」
「じゃなくて…最近、エクソシストを敵視する連中が現れたんス」

シスカは真剣な顔つきになると、言葉を選ぶように話し始めた。

「敵視って言っても、そんなんじゃなく…何者かによって殺害されてて…あ、これはエクソシストだけに限らず、各地の鬼神にもあるそうッス。凶器は決まって一緒」

「鬼憑きじゃないのか？」
「ちがうッス。鬼憑きならエクソシストや鬼神が気づいてもおかしくないんスけど…凶器は必ず――」
そこで台詞を止めると、シスカは右手で、親指と人差し指だけを突き出し、その人差し指をツクヨミに向けて、弾むように腕を曲げる。
「ばーーーん」
子供のようにあどけなくそう言った。
「…銃？」
ツクヨミは眉間にしわを寄せ、それだけを答えた。
「そうッス。しかも全部。頭の時もあれば胸の時もある…逆に、太ももを撃たれ身動きできなくしてから急所をわざと外し、ショック死や出血多量で死んでる場合もある」
「…」
「エクソシストは鬼憑きには敏感だ。だけど、瞬発力や人よりも優れた力は持ってない。だからエクソシストは一般人…普通の人間には弱いんだ」
「じゃあ鬼憑きの可能性は…ないのか」
「そういうことッス。ただでさえ行動できる人数が限られているのに、この事態…。もう大変ッスよ。
んで、次の可能性…鬼神ッスけど…」
「それはないな…」
シスカが何か言う前にツクヨミが、可能性を否定する。

「まず、狙う理由がない……鬼神はエクソシストがいなければ成り立たないはずだし…第一、鬼神はエクソシストを攻撃できない…」
「エクソシストは神の加護を受けるものだけが成せる仕事…人の中にいる『鬼』は神の子という意味でもある…しかし、鬼がいない鬼神は――」
「神の加護を受けれなかったものが、神の加護を強く受けるエクソシストを殺す…いや攻撃をすることは無理…か」
「……そういうことッス」

鬼神はエクソシストに触れることはできるが、悪意をもった行動を犯すことはできない。

「じゃあ一般市民か？」
「そうなるんスけど…そうなると疑問が一つ」
「…エクソシストならまだしも、鬼神までもが一般市民にみすみす殺される…か」
「…なんスよねぇ」

シスカは面倒くさそうにため息を吐くと、頭をかいた。

「まあ…おおよそ予想はついてるんスけどね…」

一瞬だけ真剣な表情をし、すぐに柔和な表情に戻る。

「予想…とは、上は知っているのか？」
「……まさか」

自嘲に似た笑みを浮かべながらも、シスカの口調は変わらず、気の抜けたように話を再開するべく口を開いた。

「あくまで予想ッスからね…。忙しい中、いくら優秀な幹部と言えど、自分の勘という理由で貴重な人員を割って捜査をするわけにはいかないッスよ」
「自分で優秀とはな…」
「思い込みが重要ッスよ。相手の心は読めないから、相手がどう思ってるかも分からないんスから…思い込みが重要ッスよ」
「…筋が通っているのか、通ってないのか」

はぁ、と短くため息を口の間から漏らすと床に転がっていたナイフを拾い上げる。
激しく振り回したせいか、ところどころに傷が目立った。

「後、これは仕事にあんまり関係ないんスけど…」

ツクヨミの仕草をボーっと眺めていたシスカは一拍置くと、子供の様に柔和な笑顔を浮かべた。
その時、ツクヨミは嫌な予感が胸だけでなく脊髄に伝わるように、脳内に危険信号を送っていた。

「自分も今日からこの学校に通うことになったッス」

二十話記念：フォルデレラ（前書き）

遊び心満載

二十話記念：フォルデレラ

えー、と…始まってるんですよね？
昔々、あるところにそこまで美しくもなければ目立ちもしない女性（♂）がいました

「ストップ。はい、そこおかしいよー。女性なのに雄になってますよー」

五月蝿いですね、ゴミ蟲が。
失礼…。とにかく、その頭以外なにもかもが微妙な女性（♂）は今日も雑用仕事に追われていました。
その女性（♂）の名前はフォルデレラ。見事に言いにくい名前で、目立ちませんでした。

「頭以外って、なんだよ…」

すいません、つい本音が…。

「本音なのかよッ！」

貴方がどうしようもない馬鹿で阿呆だってことは貴方に土下座しろ、と言われても訂正できません。

「そのプライドは軽いのか重いのか・・・」

まあそんな馬鹿――失礼、フォルデレラはほって置いてツインテールでフォルデレラ曰く、ツンデレ侍の継母が虐めていました。
これはとっても良い事ですね。

「良くねーよッ」
「ちょっと、フォルデレラッ！！手が止まってるわよ！」
「痛ッ・・・なにその鞭…ＳＭごっこ??」
「失礼ね！やっぱり、人を虐めるのならば鞭だって、ツキが言ってたもの」

きっと、ツクヨミは眠たかったんですね。可愛い寝ボケです。
あれ??これって、状況説明もしたほうが良いんですか??
えっとですね、リクがフォルデレラさんを鞭で叩いてます。簡単に言うならばＳＭプレイみたいな感じを浮かべてくれれば良いと思います。

「ふふふ・・・た、楽しいわッ！！」
「痛い！！痛いから！！蚯蚓腫れがハンパねぇッ！」

ツクヨミの一言で、状況が悪化してますよ…。
今回ばかりはフォルデレラさんに同情しますよ。
リクも何か変なものに目覚めてしまったようです…。

「ヴィクトリカ！！てめぇ、同情するぐらいなら助けろ――痛ぇ！！」
「だめよ、ナレーターに口聞いちゃ…本来の物語はナレーターと話をする人なんかいないでしょう??」
「ダメ！！もう限界！！だから、鞭を振り上げない――いたあああああぁぁぁッ」

悲痛な叫びが私の心を抉ります…。
ごめんなさい、ナレーターは主人公に関わる事ができないんです。
なんですか??笑っていませんよ??これでも、我慢している方

なんですから。
・・・と、まあ冗談はこのくらいにして、そろそろ止めてあげて下さい。

「・・・・・・・・・・・・・・・チッ」
「舌打ち聞こえたよ！！ワザと??ワザとなの！?」
「まあ、ちゃんと掃除しとけよー…」
「なんだ、その投げやりな言い方は」

リクはフォルデレラに背を向けて去ろうとした。
しかし、すぐにリクはフォルデレラの方を振り返り、笑顔で言った…。

「なんだよ、その小説みたいな言い方はッ！！」
「フォルデレラ…」
「いや…ナレーター通りにやらなくて良いから」

そして、笑顔で言った。
笑顔で、爽やかに言った！！←強制的に

「なんで、矢印も言うんだッ！！??」
「フォルデレラッ！！」
「な、なんだよ・・・」
「腐れ、このフォアグラめ」
「フォアッ…！」

リク母さん、ナイスネーミングです。
ナレーション通り、爽やかなところもまた良いと思いますよ
フォルデレラさんの顔、今とっても面白いですよ。本当に愉快です。

「フォア・・・って…」

いいじゃないですか、とっても良いと思います。
フォアグラは卵なんですから…あなたの頭にもたくさん寄生虫の卵でも産みつけられてるんじゃないですか？
…おっと、フォルの脳内なんか寄生虫でさえも嫌ですよね…失礼。

「いや、本来その失礼は俺に使うべきだからな？寄生虫じゃなくて、俺に対してだからな？」

そしてある日のこと――

「ガン無視！？俺のことガン無視なの！？」

リク継母様（かあさま）はダンスパーチーに行ってしまいました。
フォルデレラ…ではなくフォアグラはリク継母様の言いつけで部屋を掃除していました。

「くっそーー…しょうがないけどさ…扱いが酷いって言うか」

ほらフォアグラさん

「フォルデレラだ」

やっだぁー…この人ったら、男なのに自分のことをフォルデレラなんて愛称で呼ばせようとしてるぅー！

「んなんだよ！その言い方は！！どっかの女子高校生の真似でもしてんのかよっ！！」

失礼ですね…フォアグラさんの事を指摘しただけじゃないですか。
攻められるいわれはありませんよ？

「…はいはい、そうでしたねー」

なんですか？その棒読みは…まあいいでしょう。
話を続けます。

「どーぞ」

えーっと…どこまで読みましたっけ？
あぁ、掃除でしたね。
――…って、ここは私じゃなくてフォアグラさんのターンなんですね？

「ターンってなんだ、ターンとは」

知りませんよ。
私の頭のワープロを打ってる人に言ってください。

「……」

さ、ここはフォアグラがあどけない表情で神にお願いして魔女を召還する大事なシーンですよ。

「召還って…しかも神って…嫌な予感しかしないんだが」

まあ予感なんて、勘の一種なんですから当たらない可能性がありますよ。

ささ、いっちょ派手なのをやってしまいなさい。

「くっそぅ……あーー神様いないかなー！」

ここに神は召還しませんよ？

「…魔女でも現れてミッ〇ーマウスみたいな奴を馬に変えて、そこらへんに転がってる虫に食われてるカボチャを小奇麗な馬車にして、この継ぎ接ぎだらけの服をドレスにしてくれないかなーっ！！」

率直過ぎますね…。

えー…その時、フォルデレラ（現フォアグラ）の目の前には美しい美女が現れました。

「ほぇ？美女？」

「えっと…魔女です」

エリザ…そんなところで何してるんですか？

……コスプレ？

「違いますっ！！！」

「え…違うのか…？」

「なんで心の底から驚くんですかぁっ！！魔女ですよ、魔女！！」

あー…魔女役でしたか。

どうりで珍しい紫色の布にくるまれてるわけですね？

「布って…言い方悪いですよぅ……」

「アイツなんか気にすんなよ。似合ってるぞ？」

「ほ、本当ですか？」

「あぁ、なんかメデューサっぽくて似合ってるぞ？」
「……」

口は災いの元ですよ？
エリザがかわいそうじゃありませんか…。
かわいそうに…。

「え？俺なんかまずいこと言ったか？」

ええ、言いました。
エリザかわいそうに…メデューサだなんて。
私が思っていたハリー・ポ〇ターのマクゴナガ〇先生よりも酷いじゃないですか。

「いえ…ヴィクトリカさんのも十分傷つきます…」
「著作権ガン無視だな…オイ」

気にしたらヤスになりますよ？

「誰だよ！！」

学園編に出てくるツクヨミ達のクラスの学級委員です。

「しらねーよっ！！」

詳しくは学園編を呼んでみてねっ！
…まあ載ってませんけど。

「だろうな！じゃあ何で言ったんだよ！」

せっかく設定したのに役目なしで学園編が終わりそうだからだそうです。
ねーくすとこなんずひんと！犯人はヤス！
的なのを考えてたらしいですよ？

「いや…それもパクリだろ」
「…あの、話続けてもいいですか？給仕の手伝いに…」

あー、そうでしたね。ごめんなさい。
そしてヤスさんにも…出番がなくて、ごめんなさい。
では続きを読ませてもらいます。

「…あえて何にも言わないぞ？」

いいですよ？
ツッコミがいないならこれから展開が酷いことになるだけなので。

「よろしくないだろ！」

はいはい、分かりましたから静かにして下さい…。
子供なんですか？

「……」

では、エリザさんお願いします。

「あ、はい…では」

ざわ…ざわ…
ざわざわ…ざわ…ざわざわ

「ざわざわうっせーぞ」
「いかせてもらいます！」
「…ドーゾ」

魔女は息を深く吸うと摩訶不思議な言葉を口にしました。

「――テクノクマヤコンテクノクマヤコン…」
「ちょ！自重なし！？モザイクないの！？いいの！？」

ご清聴なさい、このお馬鹿さんが！
失礼。
魔女がそうつぶやくと、ネズミは白馬に、カボチャは麦藁帽子に…そしてフォアグラ（元フォルデレラ）の汚い服は純白のフリル付のワンピースになりました。

「わーなんて素敵な魔法なんでしょー」
「よ、喜んでいただけましたか？」
「ええ、もちろん――――誰が喜ぶかボケェッェェエェェェェエエェ！！」

なんというか、浜辺とかが似合いそうな服ですね…。
さわやか百パーセントで出来ているでしょう。

「な、何か悪かったでしょうか！？」
「いや…悪いの問題の前に」
「もしかして、白はお嫌いでしょうか？」
「いや、そういう問題じゃなくて」

これはこれは…長いのでカーット！！！

「――というわけだから」
「そうなんですか…申し訳ございません！私何も知らなくて…」
「あああああ！怒ってない！怒ってないから泣かないで！！」
やっだぁー…あのフォアグラとか言う黒い卵…卵の分際で人間泣かしてるよー…。
よっ、女泣かせ！憎いね、このっ！
「お前にそういわれるから嫌なんだよ…ッ」
「では…早速魔法をかけさせてもらいます」
「お願いします」

ふぅ、と今度は短く息を吐くと、また呪文を唱え始めた。
「テクニク・テクニカ・シャランラー」
「やると思ったよ！！今度はそっちかよ！！」
すると、ネズミは白馬になり、カボチャは馬車になり、きったねー服は美しいドレスになりました。
「きったねーってなんだよ…」
「ささ、パーティーに遅れてしまうわ！」
「…そうだな。ようやくクライマックスか」
フォアグラは白馬が牽(ひ)く馬車に乗り込んだ。
「くっせえええ！かぼちゃくせえええ！！！」
まあ、もともとはカボチャですから。においは我慢してください。

服にうつると思いますが…。
「ゲッ！」

「…で、なんで僕が王子役なの？」
かくかくしかじか四角いムーブで、王宮に着きました。
まさに超・展・開！
「…そして、なんかヴィクトリカのキャラが違う気が…」
「神（作者）は言っている……気にしたら負けだ、と」
大丈夫です、問題ありませんよ。
「……はあ」
「じゃあ踊ろうか！」
「却下」
即答でフラれました。
明日がありますよ、フォアグラさん。

「なんでだよー！」
「踊る理由が見当たらない。面倒くさい。カボチャくさい。まず何で王子なのか分からない」
「いいじゃねーかー！」

踊るのが楽しみだったんですね。
そういえば馬車の中で鼻歌を歌ってましたよね。
かわいそうに…でも諦めなさい。相手が悪いですよ。

「なあー…踊ろうよー」
「まあなんて綺麗な女性（♂）なんでしょう。でも、こんな僕を選ぶなんて、恐悦至極。しかし僕には荷が重いんです。まさに月とすっぽん。だから…御役御免」

棒読みがかかってていいと思います。
以外に話に沿ってるんですが…まあ逆に反ってますけどね。

「なんだよーっ！この眉目秀麗一枚看板公明正大羞花閉月！！！」
「…いっぱしにほめてどうする…。しかも羞花閉月は女に言うものだ……」

そんなことより私はフォアグラがこんなに四字熟語に詳しいなんて知りませんでした…。まさに目からコンタクト…あ、私は眼鏡でしたね、申し訳ありません。
そういえば結構前にリクが四字熟語をよく使うから、教えてくれと頼まれたことがありましたね。
まあ有無を言わず嫌だといいましたが。

「じゃ…そういうわけだから」
「うがーーーっ！なんでだよー！」

「…どっちにしても、もう時間だから」

冷静そうにツクヨミが言い終わると同時に、十二時を告げる鐘が鳴り響く。

決して教会の鐘なんかじゃありませんよ？処刑の時間を告げるものではありませんからね？

「くぅ…しょうがない…今日は諦めて去ってやろうじゃないか」

「いや、去らないと話が成り立たないんだけど……」

フォアグラは一心不乱にガラスの靴を脱ぎ捨てると、その場から走り出しカボチャくさい馬車へまっしぐらに突進しました。

「くっせ！！最初よりもくせえじゃねえか！！」

換気しないからにおいが溜まったんでしょうね。

消臭力でも置いとかないと…。

「先に言えよ！！」

一方ガラスの靴を渡された王子のツクヨミは…。

「ちょ…！ツキ！なんでゴミ箱にガラスの靴捨てるの！？話が成り立たないわよ！」

「カボチャくさいもん……あと、帰っていい？」

「だーーーめっ！！！」

数日が過ぎたある日。

「よくお聞きフォアグラ…」

「もうフォアグラで定着してんのな…んで何」

リク継母様は窓から空を見上げる形で腰に手を当てて、真剣な表情で言う。

この方はいろいろと満喫しているそうです。

「今日、王子の手先がこの家に襲撃に来るわ…」

「なん…だと！？」

リク継母様は悔しそうに顔を歪ませ、フォアグラは驚きに目を見開いた…。

…はて、シンデレラってこういう話でしたっけ？

「あなたは逃げなさい…これがあなたにしてあげれる精一杯の愛よ…」

「継母様…ッ」

なんですか、この寸劇。

「でも、継母様はどうなるんだよ！！俺も残って戦う！！」

「何を言ってるの！あなたは逃げるのよ！王子はあなたを狙っているのよ！？」

えぇ…あながち間違いではないですね。
いろんな意味で狙ってますし。
「継母様…でも、俺、俺……ッ！！」
「大丈夫…私があなたを守るわ…王子から、ね」
……続けていいのか不安になってきました。
えー…その時、扉をノックする音が聞こえてきました。
「来たわ！！逃げなさい」
リク継母様はフォアグラの前に守るように背を向けて扉と対峙した。
「今のうちに…私がひきつけておくから…っ」
そういうと、壁に立てかけてあった一振りの日本刀を握る。
「継母様…ッ！？それは装飾用だと…」
「ふっ…私もついにこれを使うときが来たようね」
「危ない！継母様も逃げて…――っ」
「何を言うの？私はあなたの母親よ？…血はつながってないけどね」
「でも…継母様はいつも俺をいじめて…」
「愛の裏返しよ…ごめんなさい。厳しくして…だけどこれだけできるようになったんだから、もう…一人で大丈夫よね」
「まさか――…その、ために」
あれ？これシンデレラ…じゃなくてフォルデレラですよね？
もしかして、私の知らないうちにタイムリープしてるんじゃないんですか？

…ちゃんとフォルデレラって台本にも書いてありますよね…。
「ふっ…ばれちゃったのね…恥ずかしいわ」
「継母様！！！そんなっ！」
「さぁ…お行き…」
「そんな真意をしって、いまさら逃げるなんて出来ねーよ！！」

フォアグラは自分の汚いスカートを捲り上げ、右腿についているホルスターから銃を引き抜いた……。
あれ？結局こういう流れになるんですか？
さっきよりも強く扉をノックされる。

「王宮の使いだ。いるのは分かっている…速やかに扉を開けなさい。…さもなくば、強行突破をもやむを得ないぞ」

これは…なぜに仕事モードなのか理解できないのですが…。
シスカですね、ってことはツクヨミは一緒なんでしょうかね？

「十秒だけ時間をやる」

そういってカウントを始める。

「そう…じゃあ私と一緒に戦ってくれる？」
「当然！」

自信満々に満身創痍。
フォアグラはそう答える。
シスカのカウントが残り三秒になる。
場は一気に緊迫した雰囲気に覆われる。それはなぜか扉の向こうからも感じられた。

「では、時間内に対応に応じなかったので、強行突破をします」
やがて長い沈黙の後、それを破るように爆音に似た大きな音が響くと同時に、間を隔てていた扉が吹っ飛んだ。
それと同時にリク継母様は地面を蹴り、王子の使いとの距離を一気に詰め、抜刀した。
しかし、リクの一撃は王子の使いには届かずに空中で静止する。
リクは驚きに目を見開き、呆然と王子の使い…つまりシスカを凝視する。
「これはなんの真似ですか」
シスカは特になんの動きも見せずに、普通にリクの目の前にたたずんでいる。
だが、一瞬だけ外からの光によってシスカの手からリクの握っている剣に何かが障害しているのが分かった。
「くっ…王家の狗が…」
「狗？それは自分が王子に従順という意味を示しているのならば、自分はこれほどにないほど嬉しいですよ」
シスカはそう言うと奥で銃を構えているフォアグラに視線を向ける。
フォアグラは感情のない瞳でシスカを一瞥すると――――――撃った。
「ッ！！」
遅れて反応したためか、シスカの頬をかする。

そこから血が少しだけ垂れる。
フォアグラはもう一発シスカに向けて弾丸を放つと、銃を空中に放り投げ地面を蹴り走り出す。
あー…もう帰っていいですか？
銃弾を避け、急に突進してきたフォアグラを、すばやく手を動かしその場に拘束する。

「速い――――ッ」
「甘いですね。自分に敵うとでも？」
「……ふっ…完敗だよ」

フォアグラは自嘲に似た笑みを浮かべると、抵抗もなくおとなしくシスカの紐に糸まれる。
と、思われた。
フォアグラは隠し持っていたナイフで絡まる糸を手馴れた手つきで切断していくと、あまり距離がないシスカとの間を詰め、シスカの額にもう一丁の銃口を当てる。

「…だけど負ける気がしないけどな？」

……シンデレラはいずこ？
フォルデレラもいずこ？
むしろ帰っていいですか？
え？…だめなんですか…。

「これは王家への反逆と見ても？」
「…どうせ王子と踊れなかったさ…」

…まだ気にしてたんですね。
しかし、シスカは余裕の笑みを浮かべる。

「だめだな…君は。これじゃあ主役になれない…三流のやることさ」
「どういうことだ」
子供っぽい笑みを浮かべたまま入ってきた入り口へと視線を促す。
そして、その向こうには…。
「ね、王子」
ツクヨミ王子のご登場です。
どうやらツクヨミ王子は観照していたようです。
「…ねえ」
王子が一言たずねるように口を開いた途端あたりが急に静まりかえった。
誰もが次の言葉を待っているようだった。
王子は十分、間をあくと口を開いた。
「何がしたいのかわかんない。もうシンデレラじゃないじゃん…ねぇ、帰っていいよね？」
一同がまた静まり返る。
えぇ…ツクヨミ。私も同意見です。
帰って、給仕をしているエリザと共に楽しく対話でもしましょう。
今日のおやつはブリオッシュでも、いもけんぴでもありませんけど。
「なんでだよ！！今いいところじゃねーか！！」
「そうよ、ツキ！どうでもよさそうに見えて本当はどうでも良くな

いのよ！？」
「そうッスよー…どうせなら最後までやりましょうよー…」
批判の嵐…みたいですよ？
「いや、だって台本ガン無視。シンデレラでもなんでもないし。意味わかんない」
ズバっといいますね。
今は朝じゃないですけれども。
「いいじゃない！台本どおりなんかつまらないわ！…私は敷かれたレールの上は規則どおり走らないタイプなの」
「同じく」
「合意ッス」
「いやいやいやいやいやいやいやいや…」
いやの量が多いですよ、ツクヨミ。
まあ納得できないのは分かります。ついでに、早めに切り上げたい逸(はや)る気持ちもよく分かります。
黒子というか、物語りって面倒くさいですね、本当に。
「しょうがないわね…ストーリーが脱線したことは認めましょう…」
「……認める認めないも関係ないよね？誰もがシンデレラなんて思わないよ？」
「しかーし！！話を途中でやめるなんてことはしたくないわ！ツキはいっつも言うじゃない…諦めたらそこで試合終了なのだ、と」
「言ったことないよね？…僕がいつどこでいった」
物語を早く進めたいです…安西先生……ッ！

などということは置いときましょうか。

「…じゃあ、僕がどうしたらこの物語は終わるの？」

ツクヨミ王子が言うと、一同は互いに顔を見合わせた。
そしてリク継母が言いにくそうに、苦笑いを浮かべる。
っていうか、シスカの糸はまだ解けてないんですか？その体制キツくありませんか？
何かを誤魔化すように舌ベロをペロッとだす。

「…わかんないおっ」

沈黙。
さらに沈黙。
そしてまだ沈黙。
いまだに続く長い沈黙。

「……は？」

最初に口を開いたのはツクヨミでした。
今度は照れ笑いを浮かべて、同じことを言う。

「…わかんないおっおー」
「つまりあれだ…死にたいんだよね？」
「キャーーーーッ！！王子様がご乱心よおおぉおぉぉおおぉおっ！！！」

ツクヨミは袖から愛用のナイフを取り出し、刃をリクに見せる。
とりあえず逃げることのできないリク継母は叫んだ。

「…じゃあいいからフォル、このガラスだかプラスチックだかカボチャだかの靴を履いて…」
「いや、プラスチックならまだしも、においがアレだからってカボチャではないぞ？」
文句を言いながらも、ガラスだかプラスチックだかカボチャだかの靴を履いた。
「ん？あれ…はいんねーぞ？」
「は……？まさか」
ツクヨミはフォルに駆け寄り、屈みこみながらフォルの足元を凝視する。
しばらく凝視した後、何も言わず立ち上がり――
「マア、コノ『ガラスだかプラスチックだかカボチャだかの靴』ガピッタリ合ウナンテ」
「え！？ガラスだかプラスチックだかカボチャだかの靴ってこの靴の名前なの！？決定なの！？」
ツッコミどころが違う気がするので、私が突っ込みという偉大な役割を負わせてもらう光栄極まりない限りでございます…あれ？何か文章がおかしい気がしますが…気にしないという方向で。
では突っ込みさせてもらいます。
えー…コホン。
では！！！
なんでやねん！！！

「っていうか全然足はまってないじゃないッスかー…」
「…いいんだよ、心は広く持つんだから」
「いや、いま考えただろ…早く終わらしたがために」

正直言ってこの物語、文字数が軽く酷い事になってるんですけどね…。

「だから、靴にかまってる必要なんかないんだよ。大体、王子なんてものは人の顔ぐらい覚えるものでしょう…なのになんで、わざわざ靴を履かせなくちゃならないんだろう……」

まあグリム童話の灰かぶり姫では実際パーティーに三日間通ってたらしいですからね。好きな人の顔ぐらいは覚えるでしょうね、普通は。

しかも、靴は一日目は銀、二日目は金の靴だったらしいですからね。

「でも、実際に入ってないッス」
「…彼は成長期なんだよ。だから足も大きくなって入らなくなってしまったんだよ」

まあ、どうやらフォアグラは『ガラスだかプラスチックだかカボチャだかガチョウだか鴨だかの卵だかの靴』を履けたらしいです。めでたしめでたし…。

「いや、強制的に終了すんなよ！しかも最後のガチョウだか鴨だかの卵って直訳するとフォアグラだろ…」
「いいじゃない。さすが私のネーミングセンスね！！」
「いや、むしろリクのせいじゃないかよ！！」
「……ねえ、もう帰っていいよね？」

「自分も帰ることを希望するッス…ふわぁ…っ」
えー？まだ続くんですか？
もう一段落ついたじゃないですかー…。
「大体、誰だシンデレラで劇やろうなんていいだしたのは！！」
「あれでしょ？作者かＡＧＥＨＡの向こうの人でしょう？」
「……それは言ってもいいんだ」
まあ製作者は一緒ですからね。著作権にできるもんならしてみろ！と強気だそうです。
「結局最後意味ないじゃねーか…靴入らなかったんだからな」
「まあフォル…じゃなくて、フォアグラだからしょうがないわよ」
「……フォアグラよりもトリュフが食べたい」
「自分はツクヨミさんが食べたい」
「……半径四メートル以内近づかないで」
明らかに嫌そうに顔をしかめるツクヨミ。
何か変なことを言ったか、と心の底から疑問に思うように首を傾げる。
「まあ…二十話記念のクオリティーだからな…暴走するのはしょうがないな」
「でも、記念のわりに本編よりも文字数が多いわ…これは、危機的な事だわ…やっぱりギャグの方が向いてるのかしら？」
「…どっちにしてもだめだろ」
「そうッスね…まあ成長はした方なんじゃないッスか？」
…やはり著者は病気らしいですね。お大事に。

「学園編はもうストーリーは出来ているらしいし…でも、ＡＧＥＨＡにも手を入れるらしいから二十一話はどうなるかしら…」
「まあ期待してる奴なんかいないさ」
「……だからもう終わろうよ」

もうフォアグラ…じゃなくてフォルデレラガン無視ですね。
まあとりあえず、終わりました。
これ以上やると、約一名死傷者がでそうです。
死因は……萌え死にだそうです。

第二十一話

「つまり、自分はサポートを全面的にするだけで、他にはなにもしないッスよ？」

シスカはフォルに面倒くさそうにそう言った。

「まー、エクソシストが来たってことはますますこの学園はややこしいことになるってことね」

リクは眉間にしわを寄せながら、痛む腹をさすっていた。

そんなリクを心配そうに眺めると、フォルは自分用に与えられたベッドに寝転がった。

「敵の数が多すぎだ…なんかあんじゃねーか？なぁ、ツクヨミ」

「…」

「ツクヨミ？」

「え？…あ、あぁ」

ツクヨミはどこか上の空で自分の手のひらを見つめていた。

「どうかしたんスか？」

「いや、なんでもないよ」

ツクヨミはポケットに手を入れて、机に寄りかかる。

「まず僕が言えるのは、あの石はこの学校に関わっているということだ」

「！？」

フォルはツクヨミの言葉に驚いたように、ベッドに寝転がっていた上半身を起こした。

「…アロユールか？」

「それ以外はないよ」

フォルは体勢を直すようにベッドから降り、窓を開けた。

冷たい夜風が部屋の中へ侵入し、リクの髪の毛を激しく揺らした。

「寒い…」

「こんぐらい我慢しろよー…」

「我慢ぐらいできるわよ。急に窓を開けるから、びっくりしーたーの」

プィっと拗ねるようにフォルから顔を逸らし、ツクヨミの方を向く。

「じゃあ、今回の増殖の原因はアロユールも関与してるの？」

「…可能性はないこともないが…どちらかというと、僕は愉快犯に近い感じがしたんだけどね」

「愉快犯ねぇ…まー確かに石を求めてるって感じじゃなかったよなー」

しばらく外をボーっと眺めていたフォルは、自分のホルスターから銃器を取り出しいじり始める。

「まー、石が関わってるなら話は変わるな」

「そうね…鬼憑きの排除と石の回収の両方をしなければいけなくな

るわね」
「おい、エクソシスト」
「シスカッスよ」
「じゃあシスカ、石の位置は正確にわかるか？」

シスカは眉を少しひそめると、目を瞑り石の気配を探し始め、そして目を開けた。

「この学園内にあるけど、気配が上手に…隠されている」
「隠されてる…ねぇ」

フォルは一拍置くと、ホルスターに銃をしまい込む。
そして大きく声にだしてため息をついた。

「なーんか…嫌な予感するっていうか、なんかありそうっていうか…」
「なによ、ぐだぐだ言って」
「だって、隠されてるんだぜ？受け身だぜ？」
「…だから、僕等の他にアロユールを持ってるんならって意味でしょ？」

そうだよ、冷たい夜風が吹き抜ける窓を閉じて、また柔らかいベッドに身を投げる。

「でも、それなら事態はもっと悪くなってるはずッスよ」
「…その通りだな」

ツクヨミは寄りかかっていた壁から背を離し、皆に向き直る。

「とりあえず、駆除はしながらアロユールの模索。ヴィクトリカに

は僕から連絡を入れておく。とりあず場所は保留。この馬鹿でも分からないらしいからな」
「なっ…馬鹿って…！」
「とりあえず、場所は保留。この馬鹿でも――――」
「なんで二回言うんスか！！！！！！！！」
「…ま、いいや。今日はこれまでで。アロユールのことは頭の片隅に入れとくこと。何か気が付いたら僕に言って。鬼憑きが出たら今日の様に向かうこと」
「はい！！」

ツクヨミの言葉に一番最初に元気よく返事したのはリクだった。

「リクが武器ももたずに無闇に飛び込まない…」
「うぅ…あれは…こう、ね？」
「こう、なんだ？」
「…なんでもないです、ごめんなさい」

背筋を丸めてその場で猫のように丸くなる。
それを見ていたフォルはリクの背中に指を滑らせる。リクは背筋に走った指の感触に鳥肌と一緒に背を立てた。
恨めしそうに、鼻歌を吹くフォルの頭を叩いた。

「いって…なにすんだよ！」
「フォルがちょっかい出すからでしょ！？」
「べっつにー？俺は何にもしてませーん」
「はぁ？フォルが背中やったんでしょー！」
「どこにも証拠はありませーん」

口喧嘩から取っ組み合いが始まりそうになりそうだった二人の間に、間髪居れずにシスカが入り込む。

「喧嘩は犬も食わないッスよ」
「私たちは夫婦じゃないけどね」
「でも今回はシスカの言うとおりだ。喧嘩しても何も始まらない」
「…」

ため息が口から自然に漏れ、リクは自分の刀を背負いフォルの部屋から出て行こうとした。

「リク？」
「分かってるわよ…ちょっと部屋で頭冷やしてくるの」
「…じゃあ今日はこれで解散にしようか」

欠伸と同時にツクヨミはそう言うと、皆の顔を見渡してから言った。

「明日の学校は通常通り行く」
「まじかよぉ～」
「まじだ。それで、アロユールのことはとりあえず保留。鬼憑きはまだ、この学園に沢山いる」
「親分核倒したのに未だに寄生虫のように居るなんてねー」
「そこなんだが…」

ツクヨミは一瞬言いよどみ眉を寄せたが、直ぐに表情を正し言葉をにごらせた。

「そこの確証がないんだ」
「どういうこと？だってあれが…」
「あれは多分親分核だということは間違いないんだが…」

――殺った感触がしなかった。
ツクヨミは自分の中で渦巻く嫌な予感にさらされた。しかし、これを皆には言おうとはしなかった。
「いいよ、とりあえず…これまでと同じ風に学園生活を送っていれば」
「あいよー」
「了解っ！」
「あと、フォルはあんまりシスカをあんまり敵視しないこと。信用できる相手じゃないだろうけど、シスカは…まあ信用できるから」
「まあ、ってなんスか」
「ふーん…まあ、一応頭の片隅には入れておくよ」
フォルはばつの悪そうに銃をまたいじり始め、シスカのことなど視野に入ってない様子だった。
シスカもフォル同様に波長が合わないようで、唇を尖らせフォルを視野に入れないように努力していた。
――なんでこうも仲悪いかなぁ…。
はぁ、と悟られないぐらい小さくため息を吐く。
「まあいいや…じゃあこれで」
皆の視線が一気にツクヨミに集まり、部屋の中は静寂が支配した。
「解散」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2610k/

月ノ鬼跡

2011年10月9日19時13分発行